
ネギま！ 武偵が転生した？

another

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ネギま！ 武偵が転生した？

【Zマーク】

Z6661P

【作者名】

another

【あらすじ】

俺たちは任務中の不注意で死んだ・・・はずだったんだよ！
だが突然気がつくと見知らぬおっさんが神と名乗りだす次第。
何が何だかわからん！
神と名乗るおっさんが転生させるとか言い出すし！
やつてられねえ！

設定を見直し、新しく書きなおします。

本作はオリ主最強・多少のハーレム（予定？）・文章の読みにくさ・文章の端折りがあるのでそれらに耐えられない方・チートなど邪道

!—などと思つてゐる方はプラウザバックを推奨します

プロローグ

さて、どうしてこうなったか説明しよう。

俺たちのチームは窃盗団のアジトをたたくつていう任務をしていたんだ。

俺と相棒のコリアで先に突っ込んだがこれが失敗してな。敵が投げたスタングレネードをまともに食らった一人はそのあとハチの巣にされたんだ。

「わ・・・な・・・・・・だ、」

「！」

俺はインカムにさう叫ぶと意識がなくなつて田の前が真つ暗になつた。

「「つわあああ———つ！！！」

がばつ！と起きるとそこはなんて言つか白を基調とした西洋の城みたいな部屋だった。

コリアがなぜここにいる？そしてなぜおれ生きてる？謎が謎を呼ぶこの事態・・・誰かチビッ子名探偵を呼んでくれないか？

「ん？んー？」

年齢は初老ぐらこと見受けられるおっさんがそこに座つていた。

「なあおつたんじいじじじ、なんで生きてるかわかる？」

「こじは神の城で、お前が生きているのは神の前にいるから」

「正確には生きてるんじゃないで、魂の姿と言つていいたる」

「ああー、魂ね魂・・・。つてそんな話あるわけがないだろ（笑）

「こまま死神に引き渡そうか？」

「すいませんでした。」

はあー・・・・

「なんじゃ？溜息なんぞつき追つて、妙に似合つではないか。」

「苦労してきたので。」

「やういえばなぜこじに呼んだかわかるか？」

「わかりませんよ

「それはな、ちょっととした手違いで君たちは死ぬ運命ではない所が死んでしまったのでな。その詰も滅ぼしのつもりで転生させてやろうと思ったのだ。」

「死ぬ運命じやないってことはもうちょっと生きられたってこと?」「そういうことじやが、どうも変な奴が干渉して来て君たちの運命が捻じ曲げられてしまったのじや。」

「へえ、その誰かはわかつてないの?」

「わかつてはいるが干渉できんのだ、代わりと言つては何がだが転生と能力をつけて送つてやろうかと思ったのだ」

「へえ、どんなの付けてくれるの?」

「そうじやな、何がいいかね?」

「鍊金術つけてくれよ、あと焰の大佐の鍊金術も付けてよ。あとはなんでもいいよ」

「それだけか? もうちょっとつけでもいいんだぞ?」

「あとはそっちに任せると言つたんだ。」

「そうか・・・ならこの世界における英雄ナギ・スプリングフィールドと同じだけの魔力をつけよう。」

「他には?」

「まだつけると言つのか?」

「どうせならいっぽいあつた方がいいじやん。」

「そうじやな」

「大空の死ぬ気の炎なんかもつけてやろうか」「なにそれ?」

「リボーンを読め!」

「わかつたよ。俺から一つだけいいか?」

「ユリアを連れていきたい。」

「ほーう?なぜだ?」

「面白くなりそうだから。」

「それでは制約をつけよう。お主ら2人の性別を反対にする。」

「なんだと！！」

「それぐらいいいだろ？あと君たちの記憶と装備品などはそのまま引き継ぐことにしよう。」

「なら蛇大佐もつけてる無限バンダナを3本くれ。」

「それぐらいなら願いの内には入らんがつけてやう。」

「ありがとう、神様。」

「では気をつけてな。」

「おうよ。」

「出口はあつちじや。」

神様は指をさす。

俺たち一人は新しい世界へと踏み出した。

プロローグ（後書き）

並行世界で死んだ京輔とユリアが大冒険するって感じです。

主人公

名前：村雨京輔@転生前

性別：男

身長：176cmぐらい

体重：68kg

備考：詳しくは緋弾のアリア graceをご覧くださいませ

名前：マナ・スプリングフィールド@転生後

性別：男

身長：146cm（卒業時

体重：32kg

趣味：裁縫・仕立て（服や装飾品から靴までなんでも）

備考：かの英雄ナギスプリングフィールド（次に呼ぶ時は略称：ナギと呼ぶことにします。）の残した子供のうちの1人。

ナギよりも魔力が少なく4分の3程度の魔力量を持つ。

目はアイルと同じくダークグレー 髪の色は金色

魔法属性：得意な属性は左から氷、雷、風、影

- 神からの贈り物 -

1：鍊金術はエド式を使えるようにしてもらった

2：相手の術式を解析するだけの眼@これは神が本人には言わざに送つたいわば本当の罪滅ぼし。

3：無限バンダナ@これはMGSシリーズに登場するあの無限バンダナととらえてくれれば幸いです。

性別：女

身長：162cmぐらい

体重：秘匿

備考：詳しくは自分のブログにて掲載しておりますゆえそちらを「」
覗くださいませ

自分のブログ <http://another-third-blogspot.com/>

名前：イル・ヴァインベルグ

性別：女

身長：144cm前後

体重：秘匿

趣味：読書・料理

備考：紅き翼の知られざるメンバーの息子という設定。

一応ナギと同じだけの魔力を持ち合わせる。

髪の色はアイスブルー。目はダークグレイと言った所

魔法属性：雷、影、氷、風、火

- 神の贈り物 -

1 錬金術はエド式を使えるようにしてもらつてあり

2 相手の術式を解析することができる眼@これも神が本人に
言わづ付けたもの

3 エアトレック@これは本人たつての希望の品。三足あるら
しい。エアギアのあのエアトレックだと思ってくださいです。

設定を見直した結果こうなりました。

20年前ライフメーカー創造主との決戦に勝ち、広域魔力消滅儀式を止め英雄とも
てはやされた。だがしかし、首謀犯としてとらわれたアリカ姫だが
処刑当日のそれこそピンチにナギが現れ姫を救つたとさ。（次から
はオリジナル設定になります）

風の噂ではアリカ姫はボンゴレと「マフィアのボスで先代が魔法

世界に逃れ国を作り王族になつたのではないかななどと実しゃかにささやかれている。つまりアリカ姫は死ぬ気の炎が使ってボンゴレマフィアの14代目なんぢやないか?という噂なのだとか。というか使える。

ネギはアリカ姫よりもナギに似たため死ぬ気の炎が使えない。使えたとしても実践じゃ使えないレベルでマナの方はナギよりもアリカ姫に似たため死ぬ気の炎が使え、しかも炎の放出量がすさまじい。

以上がオリジナル設定と見直しした点でした。改善した点は下に書いておきます

主人公設定 + 2011年3月28日修正（後書き）

死ぬ気の炎が遺伝にしたと言つ点と
性別とアリカ姫の出自について。

第一話

こんひわ。いやいや、こんにちわ村雨きよ・・・いやこやマナ・スプリングフィールドです。

前の記憶とかが鮮明すぎて自分がまだ村雨京輔だと言ひ風に思つてしまつことがある今日この頃。

神様もよくやつてくださいますよね、「スプリングフィールド」ですってよあの英雄の妹に生まれさせてくれるとはいじわるが過ぎるのではないか?

自分の意識がはつきりしたのは1歳半ぐらいで、そのころからちょっと飛ばして3歳ごろには自分で歩いていましたね。6歳ごろにはもう前の体に近い状態にしたかつたので訓練してましたよ。ネカネお姉ちゃんは私が夜中出ていくことを黙認してくださったおかげで結構自由に訓練出来ましたけどね。

(たぶん散歩だと思ってたのでしょうか)

そして事件が起る。これは神様が言つていたことなので一応現場にはいましたが巻き込まれてアーニャちゃんの母君にかばっていただいたおかげで自分は生き延びた。

アーニャちゃんの母君は「幸せになれ」とおっしゃっていましたが自分にはできません。スタンさんやアーニャちゃんの母君が犠牲になつたのに自分だけ幸せになるなんて私にはできない。それなら私はいばらの道を無理しても歩く。それが自分の決意だ。

それからの私とネギ兄さんは魔法学校に入れられました。

ネギ兄さんを見る目は英雄の卵を見るようなもの私もその眼で見られていて。それが一番嫌だ。その眼を何とかしてほしい。立派な魔法使い?マギスティル・マギなんてどうだつていいじゃない、歴史上の人物は正義を振りかざしたばかりに倒れていく人だつて多いのになぜその道を選ばされなければならないのか?自分にはよくわからません。

第一話

魔法学校に入れさせられてからと言つものいに思い出など一度でもあつただろうか？

頂いた無限バンダナは腕に巻きつけリストバンドが代わりにし身につけてはいますが、このバンダナを使う機会はあるのだろうか？一応前世から持つてきているベレッタ90tw02丁をいつも持つて着てますけどね。護身用ですよ護身用。

話がそれましたね、戻しましょう。

紺色の髪であることがいけないのだろうか？魔法がうまくないだけでなぜこんなことになるのだろうか？私はトイレにつれていかれ水をぶつかれ蹴られながらそう思つていた。

力があればなー・・・。コントロールとかできればそんな風にならないのか？魔法をうまく使えればいじめられないのか？それならばやってやる、やってやるよ。復讐含めてやってやる。貴様ら覚悟しろ私がお前らに地獄を見せてやる

それからの私は睡眠時間は3時間以外ほぼ魔法のコントロールと呪文を覚えるだけに費やした。

授業中に出された課題は時間中に終わらせ、そして魔法具などの勉強は放課後の2時間だけで終わらせる。それが私の日課となつていた。

そして卒業式前日。

復讐実行の日だ。

私の銃は魔法を込めるだけで弾速を変えられるようにしてあるからな。覚悟しろ蟲野郎どもめが・・・！

そう思つていると私の額からオレンジの炎が噴き出し始める。神様から渡された手袋がなぜか模様やら形状やらが変化して光っていた。君も力をかしてくれるのか？ありがとう君の力は大事にするよ

グローブをはめイクスバーーの構えを取り柔の炎を後方に噴射し、

剛の炎を収束させ怪我押させない程度にためる。

「覚悟しろ、蟲野郎！！」

「イクス・・・バーナーっ！！！」

うねりを上げて迫る炎に生徒は逃げだすが遅い、はるかに遅い！
着弾し背中が見えて煙を上げていた。やけどぐらいで済んだお前の
幸運に感謝しろ。下種が！

そして時系列は卒業式。

「卒業証書授与」

この七年間よくぞ頑張つてきた、だがこれが

らの修行が本番だ氣を抜くでないぞ」

「ネギ・スプリングフィールド君！」

「はい！」

無駄に元気がいいな、どうしたの？いいことでもありました？
眠い、こういう式典つてどうして眠くなるのだろうか？その原理を
研究して発表したら面白くなりそうだ。そして最後の私の番がきた。

「マナ・スプリングフィールド君！」

「はーい」

「卒業おめでとう。」

「・・・。」

「君には申し訳ないとしたね。」

「ふん。」

小声で話していくがそれはどうだつていいんだ。なぜ放置したかが

重要なんだよ。校長先生。

立ち位置に戻ると速効で開く。そこには

「A teacher in Japan .(日本で教師」と書かれていた。もとは日本人だから習わなくともいいけど
そして兄さんも同じのようだ。

校長室にでも行つて抗議しに行こうか

ノックをする。マナーは大事だからな

「校長、いつ日本に赴けばいいんですか？」

「そうじやな、2月ぐらいだな」

「準備ができ次第行きたいのですがよろしいですか?」

「ふむう・・・理由を聞こうかの」

「あまりいい思い出がないのは承知の上かと」

「すまなかつたな・・・。」

「それでは失礼し m 「校長!先生つてどうこう」とですか!」

私のセリフはさえぎられてしました。

「マナ・・・あなたは?」

「日本で教師をすること。。だそうです」

「ネギと同じだけど、10歳に教師なんて無理ですー・ビビうこうこと

なんですか!校長!」

「そうよ、マナはいいとしてネギつたらただでさえ、チビでボケで・
・・。」

「卒業証書に書かれたことは決定事項じや。」

「安心せい、修業先はワシの友人の所じや。一人とも安心して行き
なさい」

「ハイ(ー)」

「それとマナ君はちょっと話があるからちょっと残りなさい」

「失礼しました。」

とネカネ姉ちゃんと兄さん・アーニャちゃんは退出する。

「それで何用ですか?」

「そう邪見にするでない・・・。生徒が襲われたのはマナ君がしたことか?」

「そんなことしてませんよ。」

「そうか、ならいいのじやが。」

「それだけなら失礼してもいいですか?」

「あと!これを渡そうかと思つてな。」

手にはペンドント型の最高級魔法具があつた。

「なぜ私に?渡すなら兄さんでしそう?渡してきますね。」

「君のいじめがわかつていながら申し訳ないことをした。その罪滅
ぼしだと思って受け取ってくれないか?」

「私がいつもいじめられていたんですかね？そんなの誤認じゃないですか？」で、一矢を報いて、ありがたく受け取っておきます。」

「失礼しました。」

扉を閉め、私は急いで出発準備をする。

そうだ、アイルの所に行つてあの便利な靴をいただこう。

隣の家のアイ川家に向かし扇をたたく

はい、それで「やまと」とか

卷之二

「お邪魔します」

「はいこれ！」

一 ありがとう、大事にするよ

「おと姫を一ぱてれ田かはしい所遊ぶが生

卷之三

その靴は黒を基調とし

アーティスト用語集

私はその靴をバッケにつめる

紺色の白衣を忘れちゃいけないな、この白衣には魔法をかけて金属探知で反応されないようにした。

明日は出発だ
・
・
・
。

卷四

空港で搭乗便を待っていると、お父お姉さんが走ってきてきた。

「大」

「ネカネ姉さんじやないですか、兄さんの世話してなくていいです

九

「アリスが、呪文

そこで、矢張りはよろしく詰めておいでください」

「わかつたわ、それから便に御乗りの方は発着口ま

でお急ぎください。」 そろそろ見たいね、行つてらっしゃい。」

「はい、行つてきます。」

私は発着口に向かい歩きだす

「それからー！ 気付いてあげられなくて」「めんね！……」

涙で震えながら言わないでくださいよ。

私は背を向けたまま手を振つてこたえる。振り返ると涙がこぼれそうだったから。

さて、到着したはいいものの・・・広いよ。迷うけれど
どこなんだ。これどりあえず奥まで来たものの迷いつて。移動手段
はあるからいいけど

実験としてHATトレッケをはいて回してみるか
押す力によりスピードが決まるとかなんとか・・・。
思いつきり踏んでみた。

卷之三

いきなり「こい」ハビートでひっくりいた。

ああ！田の前に階段がある！あ、手すりに乗りはいいじゃん。私は思いつきりジャンプ！手すりに乗り上へと駆け上がる電柱がある！思いつきりトリック決めるか！

空に背を向け電柱を回転しながら登り電柱のほぼ上まで登ると手を離し地面に着地する。

卷之三

「笛声とともに拍手を受けてしまった

「ちよつとそれは……。」

「ねえねえ！何かしてたの？」にしても小さいけど、中学校と高校

二十九

「あの！ちょっと静かにして走らっていいですか！」

シン・・・。

「麻帆良学園中等部」でどうですか？」

それが何が案内するか

「お久しぶりでーす！マナ君！」

「ケツ」

小さく毒づくと

「お久しぶりです、高畠先生」

「あの案内ありがとうございました、コレ使ってみてください。」

「コレとはタバコのようにしたハーブだ。

「タバコ？ こんなものもらえないよ」

「大丈夫です、ハーブですから。」

火をつけて臭いをかいでもらうと

「本当にハーブみたいだね、ありがとうございます。もう少しあくね」

「リラックス効果が得られるので勉強に息詰まると使ってみてください。」

「じゃあね！」

「では失礼します。」

しゃーっと私は走り出す。降りて来たのか高畠先生が職員玄関から出てきた。

「大きくなつたね、マナ君」

「お世辞はいいので学園長室に行きたいので」案内を頼めますか？」「お世辞じゃないのになー。」

苦笑いをする。あんたは大嫌いだから気にするな

色々世間話とは言つても私は大した返事をしないので会話はすぐに終わり学園長室の前にきた。

「失礼します。」

「どうぞ。」

後頭部が長いのような人物がこちらを向いていた。

「あー、妖怪が学園長とはこの学校は終わりですね。」

「こらー！ マナ君、この人は人間だよ！ 後頭部が長いのは事実だけど

「よいよい、そして君のことは何と呼べばいいかな？」

「なんとでもどうぞ」

「よろしい、ではマナ君よくぞいらしたな。修行のため日本で教師とは大変じやろうが頑張りなさい。」

「はい」

「これから三ヶ月……いや五ヶ月ほどかの。教育実習生として働いてもらつから」

「わかりました。」

「でどこに住めばいいんですか？」

「そうじゃなー・・・。女子寮の管理人室が空いてるはずじゃからそこにでも住んでもらおつかの」

「あと担任を頼もうかの。」

「では後は高畠君、マナ君を頼んだぞ」

「はい学園長」

「では行こうかマナ君」

「はい、失礼しました。」

まったく、何考えてるかわからないし、英雄の子供っていう目で見ているのが一番気に入らないな。何か問題があつたとき極限まで追いつめてやる。覚悟しろ・・・。

私は管理人室に案内され、荷物を置いた後革靴に履き替えたあと紺色の白衣だけ取り出し教室へ向かう

「その白衣はどうしたんだい？」

「これは私が作ったのですが、気にしないでください」

「結構いい素材使ってるんだね、肌触りがいい」

「そうですね、素材には氣を使いなおかつ爆発などに耐えるようにしたのでそこそこぐらいですかね。」

「これでそこそこって・・・。」

それいら黙つてしまつた。

「ではマナ君・・・いやマナ先生これを」

クラス名簿を渡される

「クラス名簿・・・。」

「では頑張つてね、マナ先生」

「アー・・・。いきなり黒板消しトラップ・・・。洗礼ですか、これは

ガラガラ・・・落ちてくる黒板消しを バスケットボールを

回す要領で回しながら受けた後ワイヤーを踏み落ちてくるバケツを脚のつま先で受け矢をバケツで受けた。

完璧！私すげー！

ପ୍ରକାଶକ ପତ୍ର ପରିଚୟ

ゆづくらとつま先からバケツを下ろし回しながら歩いて黒板消しを置く

「初めてまして、新しく担任になりましたマナ・スプリングフィールドです。担当教科は理科です。よろしくお願ひします。」

「何歳ですかー！どれくら頭がいい？」「ああー！代表して新聞部朝倉和美が質問してもいいですか？」

「どうぞ、答えられる範囲でお答えします。」

「数えで10歳ですね。」

「おおー若い…。なんで紺色の白衣なんて着てるんですか?」

「緑色の理由は由たと普通の色で面白くないからで、『ど』の出身ですか？」

「イギリスのカルスと並んで生まれました。詳しく述べるなりしてください。」

「頭いいんですね？」

「一応大学卒ぐらいの学力はあると思います。」「質問はそれどきですか?」

涼しい顔をして答える。

「質問は以上です！ありがとうございました。」

「では授業を始めます、ですがその前に・・・レクリエーションでもしますか・・・。」

「ふむ・・・、レクリエーションって言つてもなー・・・。」
「何するんですか?」

「手品をしたのかと」

ପ୍ରକାଶକ ମନ୍ତ୍ରୀ ଅଧିକାରୀ

ポケットに手を入れメモ帳を取り出す。

「（）に何も仕掛けのないメモ帳があります。誰か確認していただけますか？」

「ノノノノノ！」

「私私！！」「いや私が！！」「それはわたくしか！！」

三者二様でされ

ては絶えず、と研がめていただけまるか

120

卷之三

הנִּמְלָאָה בְּעֵדָה

語のもす

「1、2、3、…・・・はいできました。」

「ハンドガンです！」

「危ないけどすごい！！！」

「大丈夫です、エアガンです。ではこのエアガンを大量に出してサバイバルゲームをしていただきまーす！」

第三話（後書き）

今回はこれぐらいで。

次はサバイバルゲームの模様を描きたいと思います。

「参加者は教室の右側に集まつてください」

データベース

「参加者確認をします、名前を呼ばれた人は返事してくださいね。」

「明石裕奈さん」「ハイ！」早乙女ハルナさん「はー！」古菲さん「はいヨー！」佐々木まき絵さん「はい」竜宮真名さん「はい」超鈴音さん「はい」長瀬忍さん「はい」鳴滝風香さん鳴滝文伽さん「ハーイーー！」以上9名でいいですか？」「

『新編 五十年史稿』第1卷

「では朝倉さん、確か廊下などには監視カメラがあったのでそのネットワークを使って実況お願いできますか?」

「ハッキングですか？」

「実はもうハッキングしてあるので実況だけです。」

「いつハッキングを！」

「それはひ・み・つ・ですよ」

「あ、あとハツキングのことは秘密にしておいてくださいね、よろしく。」

「9名じゃキリが悪いので私も入らつかと思います。」

「それは卑怯じや。。。」「

「大丈夫ですよ」

「ルール説明ですが、ルールは一つ。当たつたら即失格、教室のお戻りください。以上です。それでは一つのチームに分けます。」

「公平性を考えて・・・。佐々木さん・超さん・古菲さん・鳴滝風香・文伽さんがAチーム、竜宮さん・長瀬さん・明石さん・早乙女さん・私のチームがBチームになります。」

「メンバーの確認はできましたか？」

「……………」

「それではメンバー分のインカムを用意したのでこれで連携・連絡ができます。皆さんどうぞ」

「用意がいいねー。」

「それほどでもないのです——」

「とりあえず校舎全体がフィールドになります。」

「それでは監さん校舎に散らばつてください。」

私の合図で姫さんは校舎に散つて行つた

朝倉さんにもインカムが渡してあるのでそのインカムからスタートの合図そして今のメンバー状況などが伝わってくる仕組みだ。

「さて、皆さんは素人とはいえ運動神経がいい3人がいますので気をつけてくださいね。」

「そんな先生こそ大丈夫なのかい？」

「舐めないでいただきたいですね。」

「それは良かつた。」

「あと竜宮さん、これを見つめ

「「Jの古びたバンダナは?」

「Jから耳打ち

「Jの無限バンダナといって、弾薬がいらなくなるんですよ。夜の警備の時に身につけてみてください。その効果はわかるはずです。」

「ありがたく受け取つておくれよ」

「Jで耳打ち終了」

「何の話でござるか?」

「いえいえ何もありませんよ、Jのインカムをつけてマイクを調節してください。じゃないとしゃべったときに耳がつんざかれますので。」

「それではみなさん！準備はいいですかー？校内サバイバルゲーム・
・開始！！」

「一手中に分かれますよー。」

「竜宮さんと早乙女さんは私についてきて、明石さんと長瀬さんで
別れますよー！」

わかれたものの…。相手の実力がわからないからなーどじょっ。
とりあえず構えずに行こう。

現在は二階の廊下を歩いている。

すると向ひから鳴滝姉妹と古菲さん達が現れた。

「先生たちにはーいで倒れてもううアルーーー！」

パパパパパッ！

とりあえず私を狙つてくるか・・・。深呼吸・・・。スゥー・・・。
・・ハアー・・・・・。

「先生ー深呼吸してる場合じゃないーー！」

「大丈夫ですって。」

銃弾撃ち ビリヤード でBB弾の軌道をそらす。しかも全弾

「なつー。」

「大丈夫だつて言つたでしょ、うへ。」

とつあえずベレッタ907の弾がなくなつたからナイトウォーカーで反撃しようか。

「反撃ですよ……。」

「やついいアル……。」

「「反則技ですよ……。」

「反則なんてのせ！」「こいつ」と叫びつゝですー。」

4丁をジャグリングしちゃんだん弾を打ち出す。

2丁しか弾が込められていないので打ち出した弾は34発

打ち出した弾はわざと外しながら足元に打ちこんだり、壁に打ちこんだりして撤退を促す

「撤退アル！－！」

「「解ー。」

やつこい逃げて行つた。

「先生ほどの腕前なら並んで簡単なんじゃないのかい？」

「やつしたらつまらないじゃないですか。」

「ついていけないよー・・・。」

大丈夫、大体は私が片づけられるから。

「おおーっと！先生チームは古菲・鳴滝姉妹を退ける！…これは先生チーム有利か！？」

実況が流れ出す。

「おっとーBチーム長瀬・明石組に動きあり！…Aチーム佐々木・超組に押されている！…そこにAチーム鳴滝姉妹・古菲組が加わり劣勢へと傾いている！…」

「先生・竜宮・早乙女組はどうあるつもりなのでしょうか！…」

「それは決まってる・・・。総力戦です！…長瀬さんがいる限り、佐々木さんは大丈夫でしょうからね」

「そうだろうかね？」

「わかりませんが、やられたとなれば全力をかける限りです。」

「頼もしいね、先生」

「ついてけないーー！」

悠然と歩きだす私と竜宮さんとは違ひ早乙女さんはおりおりしてゐるが気にしない。

5分後戦闘現場到着。ずいぶんぶつ壊しましたね。結構傷入つてゐる

じゃないですか。じゃそれたくないからわざと戻しますかね。もちろん授業途中で。

「長瀬さん良く持ちましたね。大丈夫ですか?」

「結構きついで」「やる。」

「加勢は?」

「おねがいするで」「やる。」

「だそうですけど、Aチームのみなさんはどちらを狙うんですか?
こっちはあなたがたを挟撃の形になってしまいますけど。」

「クー!長瀬達を頼む!私は先生たちを相手にするアル!」

「わかつたネ、超!」

リロードが済んでいる私に隙はない・・・。はず!-

「早乙女士へ、銃を貸していただけますか?」

「あつ、はい」「ん」

「ありがとうございます。」

早乙女士に貸した銃は2丁。私が持っている銃は4丁...。ジャグリングはきついけどまだなんとかなりますね。

「ジャグリングとは奇怪アルネ」

「そうですか？ 奇怪とは手厳しい」

ふむ、」のナは身軽だから壁を蹴ってきそつな気がする。

「もうそろ覚悟してほし」アル

「こつでも出来ますけど？」

「では行かせてもら」アル……」

やつこつと壁を蹴り上へ飛び打ち込んでくる。

「こちらの戦力を失つわけにはいかない。せらせて頂きます！」

相手の撃つてきた弾全弾を銃弾撃ちで軌道をそらし当たらない方向にそらす、足の甲を狙うが全然当たらない。

巧みにかわしてくれるよ。そうじやないと面白くない。

「からば6丁つまり1丁につき17発程度だからかけぬるだから102発。これだけあればなんとかなる。

全部ホルスターにしまって相手の動きを見る。「こちらが撃つた弾が全部よけられたから出方を見るだけだ。

「どうしたアルカ？ 先生」

「当たらないとアウトにできませんからね。」

「かわして見せただけアル」

「存外当たるかもしませんよ？」

「かもしれないネ」

「今度は先手譲りますよ。」

そつ言い放つと田を開じて深呼吸…。

息を整え相手の発砲を待つ。

「それならお言葉に甘えさせていただくアル…！」

ダッ
！

今度は走ってきたか。だが人間のリミッターを外した私に隙はない
つた

「甘いなあ、砂糖より甘いです…！」

「甘くないのは仮想世界、甘くないのは現実アルヨー！」

「言えてますねえ…！」

パンパパパパパパ

相手は2丁とはいえ油断はできない。超さんはジャンプし体を回転をさせ上段回転蹴りを放ってくる、だがこっちは足に向けて発砲。そんなのは五年前から呼んでいたかのようにかわしこちらに応戦し

てぐる。銃弾撃ちでそらし、次の弾を送り出すとその弾に矢がつかず手の甲にあてて丁さん撃破

「あいやー、油断した」

「中々強敵でした。」

「先生は筋がいいな、何かしていたのかい？」

「そんなまさか」

などと会話を交わしつつ竜齧さんが大体片づけていた。

長瀬さんと佐々木さんは弾が当たったのかその場にいなかつた。

「ゲームしゅーりょーーー！勝者チームはBチーム先生組の勝利ーーー！早乙女ハルナ選手は全然役に立つていなかつたが気にしないーーー！」

「何よーーー！んな勝負に入れるわけがないでしょーーー！」

「なんで拳手したんですか・・・。」

「アハハハ^ ^ ^」

「先に戻つてください、掃除とかしなきゃいけないので。」

「ありがと、先生。楽しかったよ」

「いえいえ、ハリコニケーションとしては十分でしょーつ？」

「 そうだね。」

会話を交わした後生徒たちを教室に戻した後力メラに電撃を送り破壊した後鍊金術で床や天井・壁を修復しその日は終わった。

第四話（後書き）

一応初日授業（仮）終了
なんというか微妙でした
描写といふか表現の仕方がまだまだですね。
色々と書いていて気付かれます。
感想・誤字脱字などいつでもお待ちしております

第五話

そういうえばクラス名簿を見た限り面白そうな人がいたからその人の元へと向かおうと思つていたんだ。忘れていた私はエアトレックをはきその人の元へと走り出す向かうは研究室へだ

研究室前へと到着

とりあえずノック。マナーは大事ですからね

「どうぞ~」

「失礼しまーす」

「あ！先生どうしたんですか？」

「いやちょっと興味があつたものですから」

「見学ですね？どうぞご自由に」

「あと絡繆さんと同じガイノイドを作りに来たんですけど？」

「ああ、それなら1ヶ月を要しますけど？」

「パートだけならありますか？」

「え？ありますけど何するんですか？」

「組み立てるんですよ。」

「簡単に言わないでください。」

「簡単だから組み立てるといつも葉が出てくるんですよ。」

「簡単に？そんなばかな・・・。」

「ではパートを提供していただいて5分で組み立てて見せましょう」

「5分！？不可能でしょうがその提案を受けましょ。」

「ではお願ひします。」

「パートを山積みにしていく葉加瀬さん。ああ、そんな手荒にしちゃいけないでしよう

「ではちょっとの間外に出ていていただけますか？」

「いいでしょ、ですがたぶん無理ですよ？」

「気にしないでください。」

「では失礼します」

バタン。

ふむ、パートがあれば鍊成ができる。

私は両手を合わせた後パートの手に手を当てる。

あら不思議ガイノイド体が完成しましたー

「葉加瀬さん、完成しましたよ?」

「そんな馬鹿な・・・本当に完成してゐ・・・ありえない!どんな方法を使つたんですか?」

「中身だけはちょっとできませんけどそれは葉加瀬さんにお願いできますか?」

「え?ああ、それは明日にはできると思います。」

「ではお願ひします。完成したら私に教えてくださいね取りに参りますので。」

「はい、わかりました。」

「あー、あと放熱のためのあの素材の代わりにこいつが用意した素材を使い、放熱効率が上がつてますので」

「そんな馬鹿な!同じに見えるのに!」

「パート代としてこれだけ置いていくので。」

「パートは大丈夫ですよ。」

「一応頂くのですからこれだけでも置いていかないときが済みませんから」

そういう私はそそくと出ていき返されないよつとする。ふむ、用事は終了。あとは目的だけかな。

エヴァンジョンさんの呪いを解除し弟子入りもとい下僕入りだ。今さつきの用事というのもカードの一枚だ。決定的なのは呪いの解除になるだろう。ふつ・・・・・・にしてもあの鍊成は結構賭けだつたんだよなー。ちょっと失敗したらパートだめにするし。あー危なかつた・・・

さて・・・交渉のカードは3枚か・・・少ないな。

まず1枚目が核鉄だ

これは前世から持つってきた物のひとつとして私の改造で魔力もエネルギーとして使える。

私が発動させると突撃槍になる。形状にもよるが私のように槍など棒状のものが出れば杖のように使えるという効果を付与させた。
そして二枚目

茶々丸2機目？である。

最後の3枚目

呪いを解くこと。

3枚目が決定的だ。

明日の放課後が楽しみだ・・・。

ふむ・・・前世の装備を改良して魔法具を作りう。これも切り札になるかもしね。

確か手甲のブレイズルミナスをライトセ○バーのような光る剣付与効果は魔法・気系の物を無効化できるような効果が欲しいな・・・。無効化できる人や物のサンプルがあれば・・・。どうしようか?魔法具として無効化するものを作つて鍊成で組み合わればいいか!!--そうとなれば無効化できるリングみたいなのを作らねばこの素材と・・・。これで出来るはずだ

パリパリパリ

鍊成して完成だ!!

実験できそうな所が...

しそうがない、結界はつてばれないようにするか。

・・・結界展開完了。よし実験スタート

アーク バスターード マイ マジックスキル 魔法の射手 サギタ・
マギカ 光の一矢! ウナ・ルークス

一筋の光は指輪に当たる直前音を立てて消え去つた。

「よつし! 成功!!」

思わず独り言を声に出してしまつた、大変恥ずかしい。

ブレイズルミナスを鍊成し直し形を細い円柱の様な形にする。その円柱にはボタンが一つだけついておりそのボタンを押すと青い光を放ち、まっすぐな刀の様な刀身が現れた。

刀身をひつこめ、指輪と円柱をすぐそばに置き鍊成。多分これで丈夫だ!

Let's 実験!

結界はまだ解除してないからそのまま続行。

台座を鍊成で作りだし刀身を出しつぱなしにしその台座に円柱をセット。

3mほど離れ再び呪文詠唱

アーク バスター マイ マジック スキル 魔法の射手 光の一矢！

魔法の矢が刀身の50cmほど前で音を立てて消え去る。

再び成功だ！！

これは武器としても切り札としても使える。

どの程度が限界なのかはよくわからない。だが雷の暴風ぐらいは耐えれるとみた。

イクスバーナーの限界も一回試してみたいが…。

ふーむ・・・炎圧は多分限界はー・・・、50~60万F ぐらいいかな？よくわからぬ。困ったなー・・・。
明日の交渉が楽しみだ・・・。

第六話（後書き）

ちなみに炎圧の単位のFっていうのはファイアンマボルテージの略です。

時系列は初日の夜ぐらいですね。わかりにくくてすいませんへへへ；、誤字脱字・アドバイス・感想があつたらぜひぜひお寄せください。

さて、今日は快晴。交渉口和じやないか、こんな日にこそ交渉しないと損な気がするよ

今日の格好は「様々な難問奇問を力技で解決させる秘密道具を持たないドラ〇もん」すなわち執事服だ。燕尾服じやないぞ。執事服だ（大事なことなので一回言いました。）ちなみに綾崎ハ〇テの執事服を思い出していただければよろしいかと。

とりあえず交渉って言つたつて話し合ひみたいなもんだから相手に粗相があつちやいけない。

水筒2つに紅茶と珈琲を入れて持つてくこうか。お茶菓子にクッキーがあつたはずだから適当に入れておくことにしよう。

これじゃあ結構大きめのバッグが必要になりそう・・・魔法具としてどれくらい入れても大丈夫な白衣を作つたはず・・・。色が・・・まあこんなときだ何も言つてられないな。これ着て出勤しよう。

いつものカバンに核鉄とブレイズルミナス改を入れて準備完了！さて出勤せねば。

私はその扉を開け学校へと走り出す。
相変わらずトリックを決めつつ出勤。

職員室前に到着

ガラガラガラ。

「おはようござこまーす」

「ああ、おはよう。マナ先生」

「おはようございます、新田先生。早いですね」

「これぐらいどうつてことないですよ」

軽い会話をしつつ席につき自分で作つたPCの電源を入れつつどうしようか考える。

そういうしてゐうちに職員会議の時間になってしまった。

以上で職員会議を終わりたいと思います。

あー終わってしまった。全然話聞いてないけど録音しておいたから後で聞き直そう。2・Aでの授業は確か3時限目だったはず。他の所でも授業あるからさつさと準備して向かうとしよう。

「すいません茶々丸さん、エガツンジHリソさんにお話があるので
すが。」

「内密なお話ですか？」

「ええ、出来れば今日の放課後に屋上に来ていただければと思います。」

木乃いをじか作るをもて

よし、
完璧

あとは放課後を待つだけだ。

そして時系列は方語後は

屋の隣を正面に見て、腰に手をあてて、なんとも言えない表情で、扉を開け、決戦へ。

「お仕事はいかがですか？」

手蔵し一反心ですね。

—こちらの要件をお話し

第二章にしたがひの「たゞ」

「アーティストの対話」

そう言い放ち胸の前で両手を合わせ次に地面に両手をつく。

警戒の態度

鍊成したのは椅子3つにテーブル1つ

ג' ינואר

「ふん」

「珈琲と紅茶ありますけどどうがいいですか？」

「手回しがいいな、紅茶を頼む」

「はい、どうぞ。」

水筒のカップを田の前に置きお茶菓子を置く。

「対価の話をしようか。」

「そうですね、まず対価のひとつとして呪いを解きましょう」

「ほう、呪いを解く・・・。解けるのか！今すぐ解け！」

「まあまあ、もつちよつとお話ししましょう」

「そうだな。」

「あなたの選べるカードは4つまず一つ 魔法を無力化できる武器
一つ ガイノイドロボット2機田 三つ 定期的な血の提供。

四つ 核鉄」

「一つ田の 魔法を無力化できる武器 と四つの田の 核鉄 とか言うのがよくわからんな」

「実物を見てもらった方が早いでしょう」

カバンから核鉄とブレイズルミナス改を取り出して見せる。
両方とも発動させてみる

「その核鉄の存在はまあまあわかつたがその無力化のほうは全然わかつていなーいぞ？」

「この武器・・・。仮にブレイズルミナスと呼ぶことにしましょう。このブレイズルミナスは科学と魔法の融合です。無力化は魔法が、この刃の部分は科学で作り出せます。」

「そんなことはどうでもいい。だが無力化は美味しいな・・・。」

「呪いは今すぐここにとけましょ、でないと信用してもらえそうにないですからね。」

「よし、今すぐ解け！」

ブレイズルミナスを手に取りエヴァンジエリンさんを見る

なんというか半透明な鎖がぐるぐる巻きになっている。

鎖をブレイズルミナスで切り破壊。どうやら呪いの鎖だつたらしい。

「魔力は戻らんのか？」

「呪いとは無関係みたいで、ちょっとわかりかねます」

「いや、十分だ、礼を言つ」

「……これで信用していただけましたか？」

「弟子入りの件の対価はどう

「ああ、そうだな、無力化の奴を私によこせ」

「アサヒ」

刃をしまい皿の前に置く

「はい、それだけです」

「簡単だな。」

「そんなもんですよ」

「ううん、貴様の父親のことについては興味あるのか?」「なぜ興味があるのか?」

なせ興味がわくのがよくわからぬせん」

「ふ、ふふ、・・・・・ははははははそ、うか、そ、うこ、う答、えを出

一
二
三
四
五
六
七
八
九
十

「そうだな、稽古をつけてやる明日から仕事が終わったら私の家に

來い

はし「アノタ」

そへし終えぬとハヤハシヨリンさん……いやマスターはそ

ふーむ・・・。だいぶ疲れた、交渉つて疲れるものだつたかな?

まあここや、Jのままだと怪しきれるから練成し直して直しておか

なしと

再び両手を胸の前で合わせ地面にあて鍊成し普通の屋上に直す。
よし、これで後は片付けて帰るか。

ふわあー・・・。今日の業務終了した一マスターの所行つて執事のまねごとしないと、言うわけでマスターの自宅に到着。

「マスター來ましたよー」

「よく來たなー」

「出迎えに氣合入つてますね・・・。」

「弟子をとるからには本氣でやるからな！覚悟しろよー。」

「もちろんです！氣合を入れるためにこの服装だつて言つのにー！」

「見た所普通の・・・・いや！これは執事服・・・・？」

「その通り！実は私は執事服を着るとなぜか気合いが入るんですー！」

「ほほーう、その幻想をぶち殺すー！」

「禁書目録・・・。」

と言つわけてダイオラマ球に入り修行。

とりあえずざつと使えるものをちょっと見せるとのことで色々見せることに

「とりあえずマスターは知らないと思いますが「私に知らぬことなどない！」あ、ハイ・・・。」

「で、続けますけど・・・。これが死ぬ気の炎と言つて・・・「なんじやそりやーーー！」え？だから死ぬ気の炎・・・。」

「この死ぬ気の炎は炎 자체が破壊力をもつた超圧縮エネルギーがこの形になつたものです。」

「アバウトだな。」

「それくらいしかわかつてないのでー・・・^_^。」

「で、次に鍊金じゅ七「なんだよそれーーーーー！」だから鍊金術と言つて・・・。」

「続けますよ？私の行使できる鍊金術は一種類その鍊金術法を生み出した人物の名前を取り分類されます。一種目がエド方式といいま

す。」

「方法は簡単両手をとりあえず合わせたあと鍊金したい対象に両手をあてるだけです」

「そんなに簡単なのか？」

「話し合いした時にテーブルとイスを鍊成したじゃないですかへへへ；

「ああ、そんなこともあったな」

「・・・（忘れられてる・・・。」

「どうした？話を続ける」

「あ、っはい。続けますが第二にロイ方式といい、鍊成陣が描かれた手袋を身につけパチンと指を鳴らすだけ、あら不思議。目標先に爆発が起きるじゃありませんか」

「使えないな。」

「真っ向否定しないでもいいじゃないですかへへへ。」

「後はないのか？」

「あと一つだけありますがそれは道具なので関係な「とりあえず見せろ」ハイ・・・」

「これも話し合いの時に出ましたが核鉄という道具で、個人個人が発動させると違う物が現れます。私が発動させると突撃槍になります。」

「武装鍊金！・・・ホラネ？」

「ほほーう面白い、私にも貸して見せろ」

「・・・（これはフラグ！貸したら絶対に帰つてこない）。」

「どうした？師匠命令だぞ？」

「どうだ」

「どうすればいいんだ？」

「武装鍊金と声高に叫べばいいんです。」

「武装鍊く・・・いや、今はやめておこう。」

「そうですか？よければそれ一つ贈呈しましょ。」

「ほーう、下僕としての自覚が出てきたか。」

「

「大変お気に召してるのでないですか・・・^_^・」

「今日はこれぐらいにして夕食にしよう。」

「はい！」

「では自分が用意して来ますね」

「ちょっと待て、何をするつもりだ？」

「え？ 夕食の準備ですが？」

「茶々丸が用意してあるからいい」

「・・・マジかよ」

「その素の反応が怖いわ」

「一応料理の腕前とか他もろもろ自信あるんですけどねー・・・」

「それがどうした？」

「舐めないでくださいよ、ほほ落ちこぼれと思われていたため大体自分でやらなければならずやつてゐるうちにすこくうまくなってしまつて、一流料理人をうならせるレベルになつてしまつた私を舐めていると痛い目に会いますよ」

「それは面白い、そのうち腕前を見せてもらおうか」

「もちろんですとも、見ててくださいよ。」

そうしてゐうちに一日が終わってしまった・・・。

第九話（前書き）

この話は2月前半のお話。
そひ、ネギが日本にくるちよつと前のお話。

第九話

ハツキリ言おう。学校の担任するとか理科教諭するとかは全然大変じゃない。むしろ楽だ

魔法の一つやらを覚えるのもまだいいだろう。私は物覚えがいい方だからな、自分が言うのもなんだが・・・。執事をさせられている件についてだ。

「おーい。マナー、ワインおかわりー」

「伸ばすと食事のマナーとかのマナーと勘違いするので伸ばさないでくださいね。あと継ぎ足したのでどうぞ。」

どうやら執事の才能があつたらしい。こんなので大丈夫だろうか?

「先生はゆっくりしててよろしいんですよ?」

「直々の指名ですかねー・・・。」

マスターはだらけている・・・。色々大丈夫なのだろうか?修行には支障がないのが不思議だ

修行内容と言えば大体は自主練習・実践が主となっている。そういうえばの話。茶々丸さんの妹となる存在を私が作りだしたわけだが、名前をまだつけていなかつたな。と言う話になりその議論が白熱し結果私の案「笹丸(ささまる)」になつた。

その笹丸の動力源は基本はゼンマイ・魔力・そして死ぬ気の炎の三つから構成される。ハツキリ言つてしまふと死ぬ気の炎の効率が良すぎるのが困りものだ、効率がいいので茶々丸さんの飛行航続時間より大幅に伸びる結果となつたりする。

茶々丸さんの飛行可能時間は15分だが笹丸はなんと1時間半もの間飛行可能であると理論的にはなつていてがどれぐらい飛行できるかはいまだ不明。というか試していないだけ。手抜きで申し訳ないと思う。

動力供給は一つ採用している。まず後頭部にあるゼンマイ+魔力の

背中にある手の形をした一つ田ハツキリ言つと貯蔵タンクに炎をためておけば一週間は持つ。ジエットやら武装を使わなければの話ではあるが。

武装の話はまた後日と申つわけで。

お？そろそろ出られるからそろそろ出で明日に備えなれば。

「ではマスター修行はまた明日といつわけで失礼します。」

「おひ、じくろい！」

「お氣をつけて。」

「ではまた明日。」

わて、帰つてプリントなどを作らないと

あーあ、どうしたもんかなー。

笹丸のオプションパーツでも・・・。

「おこ、てめえ金出せよ」

ん？何か言われた氣がする

「何用で」「金出せよ！－」

壁際にたたきつけられた。

肺の空気が全部外に排出させられた。

絶息

「いきなり何するんですか？」

「いやいいから金出せよ」

「いやです。」

「出せつての－。」

「大声出しますよ。」

「出してみるよ」

「ワーヘンタイがい」と「うるさい」、こいつで刺されたいか？
わー、ナイフが腹のあたりに食い込んでる。

長さ・形状を見る限りサバイバルナイフと推測する。

「こいつで怪我したくないだろ？なら金だせよ」

「・・・・・。」

相手に見えないように死ぬ気の炎を出しナイフにそつと手を当てナ

イフの刃を溶かしておぐ。

思考する

まずナイフで再び脅す。ナイフの刃が溶けていることに驚く。右頬に一発ストレートを入れる。一発目にあばらを一本折つておく。反撃を火を灯した右手のグローブでガード。ガードした際に右手をつかみひねる。蹴りを一発入れ腕の骨を碎く。そして相手は腕を折られただけでは折れない。蹴りをかわし腕をつかんだまま再びあばらを碎く。

思考の世界から現実へと戻る。

ナイフを田の前に散らせる。

「な、なんで溶けてやがる！」

右頬にストレート炸裂

二発目みぞおち近くのあばらに左手でアタック。

反撃を右手でブロックし、右手をつかみつつ脇を抜け後ろを取る右手を使えなくするため蹴りを入れ右手を折る。

反撃を取るため相手は体をひねりけりを放つが私はかわし再びあばらに蹴りを入れ相手を蹴り飛ばす。

診断・・・多分あばら二本骨折、右腕複雑骨折。総評全治4カ月。

「こんなことはせずにまともに生きる事ですね。これを教訓にして。

」「うぐぐ・・・・て、テメエ！ 何もんだ・・・・。」

「いつかいの教師ですよ。」

「教師があばらを折るかよ。」

携帯を取り出し、「メールし救急車を呼ぶように」と言い、住所を告げる。そのあとすぐに携帯を閉じる。

「救急車読んでおいたので」「心配なく」「アフターサービスがよろしいようだ。」

私はそそくさと歩き去つていった。

第九話（後書き）

次はネギが登場するかもね！
ご意見・誤字脱字があればお教えくださいませ

一ヶ月つて言うのは実を言うと早いものですね。

実を言う所修行に明け暮れていたというより業務に慣れるほうが大変だったという事実。

そして本日兄さんが来日すると言う話を耳にはさんだので（迎えに行くように言われた）迎えるためにとりあえずベンチに座り待っていると。こんな放送が。

学園生徒の皆さん！こちらは生活指導委員会です。今週は遅刻者ゼロ週間。始業のベルまであと10分を切りました！急ぎましょうああ、そういうえばそんな週間にいると会議で言つてましたね。

今週遅刻した人には当委員会よりイエローカードが進呈されます。くれぐれも余裕をもつた投降を心がけましょう。

この時間帯は混むんでしょうかねー？人がゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴ雪崩のように登校してきますね。

やはり人がゴゴゴゴゴゴゴゴゴゴいやいやいやいやお？明石さんだ。

「あ！おはよう！先生、どうしたの？」

「新人さんが遅くて。」

「そうなの？がんばってね！」

手を振つてこたえる。

おっ？明日菜さんとこのかさんの隣を走るのでかいリュックの少年に見覚えがある。

あれは兄さんじゃないか！

私はあわてて電柱に連続アップソウルを決めつつ3人に迫る！

だが何やら雰囲気が変わり少年の頭をわしづかみし持ちあげている。推測すると、このかさんが持つている本。ちらつと見えたが占いの本らしい。兄さんは魔法使いだ、占いの話をしているのを小耳にはさみ占つてやつた結果わしづかみされたのだろう。

だがしかし！

止めなければ！あのイベントだけは！！

もう、モーションにはいつただと！？もう少しあと一秒！

私はギリギリ明日菜さんの前に立ちくしゃみを防ぐ。

おかげで白衣が汚れてしまつた。そして強烈な風が発生。ラッキー

スケベとはこのことだ。

ミッションクリア。

「お久しぶりです、兄さん。」

「久しぶり。」

「えええええ……」んなガキンチョの妹！？こんなに違うのに？

「兄が失礼なことを言つてしまい申し訳ないです。」

「僕は占いの結果を素直に「失礼なことに変わりはないでしょ」うう・・・。」

そんな顔をしても何も許す気にはなれないな、私はもとは男だし？あと失恋の相が出てるだあ？そんなことを見知らぬ、そして小学生の様な子供にそんなことを言われれば誰だってああやつて怒るだろう。気持ちはわかる。でも抑えましちゃうね、明日菜さん

「では兄さん、あと明日菜さんとのかさんも一緒に学園長室へ。」

「学園長！これはいつたいビーウーことなんですか！？」

「まあまあ、アスナちゃんや」

「なるほど修行のため日本で教師を・・・そりやまた大変な課題をもうたのー。」

「は、はい！よろしくお願ひします」

「しかしますは教育実習とゆーことになるかのう、今日から3月までじや」

「ところでネギ君には彼女はあるのか？ビーアイな？うちの孫むすめ」「学園長先生、話を続けてください」わかった、わかった。」

「ネギ君、この修行はおそらく大変じゃぞ。ダメだったら故郷に帰

らねばならん。一度とチャンスはないがその覚悟はあるんだじゃな?」

「ははいつやります! やらせてくれさい!」

「…………うむ、わかつた! では今日から早速やつてもうおつか

の。指導教員の静菜先生を紹介しよう。しづな君」

「はい」

「あら! めんなさい。『わからない』とがあつたら彼女に聞く
ところ。」 よろしくね 「あ、ハイ」

「せうせいもう一つ」

「いのか アスナちゃんしばらくはネギ君をお前たちの部屋に泊め
てもらえんかの」

「「げ(え)」」

「ええよ」

「もうそんな何から何まで学園で「明日菜さん、私が変わります。
あ、ああ、はー」

「それはちょっと無理があると思いませんが?」

「ほー、なぜじや?」

「兄さんは寝相が悪く、自分の寝床と人の寝床を間違え、迷い込んだりする人を安心して部屋に置けると言つんですか?」

「じゃがしかし、他における部屋がないんじゃよ。わかつてくれないか? マナ君」

「教員用の寮があるでしょ?」

「空室がないから仮という形でじゃなー」

「空室がないなら仕方がありますが、空室ができ次第いつつていただきます。」

「わかつたわかつた。」

「そういうわけじゃから仲良くしなさい」

「「「失礼しました。」」」

私は明日菜さんに駆け寄り小声で

(ごめん、部屋変えてもうつもりが失敗しちゃいました。)

(先生の気持だけ受け取つておきます。)

(そういうわけだから寝るときは気をつけてね。)

(はい。)

そんなこんな話し�込んでいると我々兄妹が担当するクラス2・Aに到着。

はあー・・・。また手の込んだトライップしかけるなあ。

「ネギ先生、私が先に入るので後からついてきてください。」

「わかったよ、マナ

「いまは勤務中ですよ。」

「あっ、ごめん!」

これからネギは先生への一步を踏み出す。

第十話（後書き）

ネギ登場です。

まだネギ登場した回の半分くらいですね。

ご意見・誤字脱字などがあればお知らせくださいませ。

第十一話

side マナ

さて、この日の前にあるトラップをどう回避しようか？最初にかかったときみたいな感じでいいか。

深呼吸

よし、やるか。

扉を開ける。

落下していく黒板消しを回しつつ受け止め回し続ける、ワイヤーを踏み回避、後ろから降つてくる矢を左足の靴の裏で受け止め、そのままバケツを足で矢を受けとめきつた。

はあー・・・。

そしてあからさまに平常を装う。両手を広げ
「へーイ！」

意味のわからないことを言つたと自分で自覚している。

「――「す」――！」」「」

バケツを下ろし兄さんに入つてもらひ。

「とりあえず、新しく来た副担任の先生に自己紹介していただきます。ではどうぞ」

「今日から」の学校でまほ・・・・英語を教えることになりましたネギ・スプリングフィールドです。3学期の間だけですけどよろしくお願いします。」

「――「キャラアアつかわいい――――！」」

「騒がないで！代表して朝倉さん質問をどうぞ」

「えーと麻帆良新聞の朝倉和美です！歳はいくつですか？」

「かぞえで10歳で・・・・」

質問タイムに入ったのでもう心配ないと思われたので窓を開け自分で作つた飴を口に含み考え方をする。

・ そういうれば今後の展開はどうなるんだったかな？ふせぐべき案件は・
・ はて何だったか？

「質問は以上で終わりです。ありがとうございました」

「ではネギ先生授業がんばってください。」

そういうと私はさつさと教室を出て、職員室に戻る。

面倒なことを起さないでくれると助かるんだけどな

時系列は放課後へ

やつとひと段落ついたし、今日はかなりグロッキーだからな・・・

おやー？ 兄さんじゃないか、どうだつていいか。

でもその視線の先には宮崎さんがいるが、その後ろには明日菜さん

かいる。これは危ういアケじゃないか？

ポケットから一枚のカードを取り出しそのまま手に持ちながら一声

「アーティストー...」

その一言を言い放つとカードは光だし、ボンと言つ音の後に飛び出

した人物は自分ではなかつた。

side 術

「あれ・・・・・あれは27番の富崎のどかさん・・・・・たくさ

「本を持って危ないなあ」

「あつ」

「...。せひそばへ。」

月の歴史

ネギは走り出し宮崎のじかを無事キャッチする
「アタタタ・・・ 大丈夫? 宮崎さん・

アタタタ・・・
大丈夫？宮崎さん

そういうい終えると僕は田の前を見る

真っ黒のスーツを着たかつこいい金髪のお兄さんが立っていた
そのお兄さんは何かのピンを引いてほおつた

数瞬だった。

その何かは爆発し煙を辺りにまき散らす。

煙の中黒い何かが森の方へ向かったのがなんとなくわかった
でもあるお兄さんにマナの魔力をちょっと感じたけどなんだつたん
だろう・・・?

魔法を明日菜さんに見られなくて良かつたー・・・。

side out

side 明日菜

「ん？あれ、あいつ・・・・・」

ネギを見ていたはずなのに・・・?

あれ？なんで目の前が真黒になってるの？

人が立つていたよつな・・・?

目の前を覆つていた闇が取りさらわれたがその真黒な闇は闇ではなく
マントだったようでそのマントをはあると金髪の人物は何かのピ
ンを抜き落とした。

その落としたものが爆発し煙が辺りに立ち込め。

何かがその煙から飛び出して行つたけどなんだつたんだろう？

そしてネギは本屋ちゃんを抱きかかえて転んでんの？

side out

side マナ

火加減を間違つた・・・。

1割ぐらいと思つてもかなり間違つた炎を噴出したようだ。

でもこの体すつごい使いやすいし、知識まで詰まつてるとは思わな

かつた。

かなり便利なカードだ・・・。作つてよかつたわー
これ麻帆良祭の時に使えるわー。

さてこれからマスターの所に行つてびっくりさせるかー

第十一話（後書き）

とつあえず出してみたボンゴレ^{ブリーモ}世

マナの中身は基本的に男なのですが、すぐに適応できるのがいい所ですね。
あ、このカードの名前が決まってないので、1週間の間にこのカードの名前募集します

どしどじご応募くださいませ！

そしてボンゴレ世の名前といつかこの世界での名前も募集します
あと他に魔法具のアイディアや服装のアイディアそして魔法武具などのアイディアがあればどしどじお寄せください！

あと感想・誤字脱字などの指摘などお待ちしております！

第十一話

side アスナ
は？なんでネギが本屋ちゃん抱えてスライディングしてんのよ。何
が起こったわけ？

「あ……あんた……！」

アスナがネギのスーツの襟をつかみ雑木林に引き込む。

「あんた本屋ちゃんに絶対何かしたでしょ！！説明しなさいよ！！」
「何もしてませんよー、階段から落ちそうな所を助けたぐらいです
けど……。」

「それだけじゃないでしょ！！絶対何かしてるでしょ！？」

「本当に何もしてませんよー」

「じゃあ今朝の黒板消しどう説明するのよ！超能力とかつかったわ
け！？説明しーなーせーいー！…それともなに？超能力者とでもい
うの？白状なさいっ！」

「僕はま、魔法使いで……」

「そんなのどつちでも同じよ！」

「あつ！じゃ、じゃあ朝のアレはあんたの仕業ね！…」

「ゴ、ゴメンなさい！」

「他の人にはれると僕大変なことに（修行終了）のお知らせ的な
意味で」

「んなの知らないわよ！…」

「むむむーー！秘密を知られたからには記憶を消させていただきま
す！」

「ええつ！」

「ちょっとパーになるかもしだれませんけど許してくださいね

「ギヤー……ちよつと待つて……」

「消えろ……！」

s i d e o u t

s i d e マナ

「 ろーーー！」

ん？難か聞こえましたね。

「 キヤー——ツ——！」

悲鳴？聞き慣れてるからあんまり反応したくないのが本当の所ですよ。

そんなことも言つてられないで駆けつけますが・・・。修羅場とはこうこうことだったのかー。

「どうかしたんで・・・。コイツはいつたいどうじつことだ・・・。
？」

さて、私の立ち位置は明日菜さんが右側に立ち、左側にネギと高畑さんが立っている。こいつはいつたいどうじつことだ・・・？
いつも来ている紺色の白衣を脱ぎ一人の目の前に投げつけ一人の視界を防ぐ。

そしてスーツの上着で明日菜さんの目の前に投げる。
極めつけにスマートクグレネードのピンを抜いて放る
ボンツ

「 「 「ゲホゲホゲホツ」「」」

パシン！ダン！！

壁を一つ鍊成して仕切る。

幾分煙がはれたあと、ネギがかぶっていた紺色の白衣を取り去り明日菜さんを隠している壁の後ろへ行きしゃがみ込んでいる明日菜さんに白衣をかける。

「うちの兄が粗相をして申し訳ないです。」

「本当にできた妹ね、アンタは」

「一応教師なのでアンタはよろしくないと想いますけど」

「ああそうだつたわね。マナ先生」

「ああ、あと制服代です。」

財布から五万ほど出して手渡す。

「ここなんにもらえないわよ！せいやー一万ぐらいだし」

「うちの兄がいつも迷惑をかけていますからこれぐらい当たり前です。」

「だけd「バイトをしていつも働いている明日菜さんへの労いと慰労を込めたのもありますけど」そ、それならしうがないわね・・・。」

渋々受け取る明日菜さん。だけど他の意味を込めた五万円なんですけどねー・・・。それと今はお金が有り余っているから特には困つていらないからなのだけど。

「ネギ先生！」ことひでこは学園長に報告をさせていただきます。

「ハ、ハイイ」

そう言い終わると私はそこを離れる。高畠先生を連れて。

後ろで言い争っていたりする声とか罵声とか聞こえるけど向も気にしない。

歓迎会は出なかつたので割愛するよーー

- ・・・そういえばポストに私宛になんか手紙が来ていたのだけれどなんだつたんでしょうかね？

内容はこんな感じ。

「I read the material that you had sent the other day. (先日あなたに送つていただいた資料を拝見しました。」

「I will promise this product to be improved based on this material. (この資料をもとに製品を改良することをお約束いたします)

「I think that the package that was going to be sent after the letter that was going to be sent this time reaches. (今回送らせていたいた手紙の後に送らせていただいた小包が届くと思います)

「Next, please receive it because the reaching package is good of the reward. (次に届く小包はお礼の品です) でお受け取りください。」

とこう内容だつたのですがねえ。怪しそうる……。ありえない。
だってネットブロウジング（ハッキング）していたらアメリカの軍事兵器開発企業の開発していたパワードーストーツに欠陥があったからその欠陥部分を文書にして書き表したあとその部分をどうすればいいかについてのアドバイスを書いたものを送りつけただけ。
で送られてきたのが……。

「なぜにコレなんですかねー……。」

「なんでこれなんでござろうかねー。」

「うわっ……長瀬さんなんでここにいるんですか！！」

「いやー、面白そうなものを開けている様子だったのを見させていただいたでござるよー。」

「あ、ああ、そうなんですか。（なぜか）の理由で納得できるのがありますよなあ。」

「にしても素晴らしい刀でござるなー。ビリード手に入れたんぢゃねるか？」

「軍事企業にアドバイスしたらコレと謝礼金をくれたんですよ。あと小包がもうひとつあるんですがねー開けたくないんですよ。その時期じゃないような気がするので。」

「それなら別にいいでござるがー……。」

「どうしましたか？ 言いもどって……。」

「この刀……、一本頂けないでござるつか？」

ちなみに送られてきた刀……、というの高周波ブレードは3本ある。そのうちの一本を欲しいという。ちなみに刃渡り85cmに柄の部分が25cmの110cmで鐔が付いていない直刀となつている。

「いやー、それについてはそれについては別にいいんですけど。ああ、そうだ。今度龍宮さんと甘いものを食べに行くのでその時奢つ

てください」

「お金を持っているのになぜでござるか？」

「この刀の代金みたいなものです。」

「あい、承知したでござる」

「今日はもう遅いので部屋にお戻りなさい。」

「わかつたでござる。あとこの刀丁寧に使わせた頂くでござるよー」「その刀はどんなことがあるとも折れない、欠けない、曲がらないが基本コンセプトらしいので大丈夫ですよ」

「おーそれはありがたいでござるなー、後生大事に使うでござるー！」

「では先生これにて失礼するでござるよ」

ドロン。

「はいはい、やようなら。」

絶対に忍者だ・・・。間違いない。そしてあの刀を忍者刀として使う氣だ・・・間違いねえ。

うむ、大切に使ってもらつのはいいんですけどなんというか恥かしいですね。

さて明日も早いのでこれで寝る事にしましょうか。

プロローグ

俺はいわゆる普通の・・・いや普通じゃないか

俺の職業は武偵だ。武偵つていうのは武装探偵の略で、猫の搜索から浮氣調査はたまた殺人事件や銀行強盗など凶悪事件の増加に伴いふやされたつていうか国家職業みたいなものだ。

この職業は職業柄人から妬み、嫉みが多い。事件にかかわったがために闇打ちされたりとか、国家機密に関することを知つてしまつたがために再び闇打ちされたりとかとか、立てこもり犯を捕まえようとして逆にやられたりだ、とかとかとか！

つまり死に安い職業だつてこと。まあ俺はテンプレの如くトラックで一とか空きかん踏んでーとかではなくただの殉職。

だがしかし俺に待ち受けていたのはテンプレの如く転生だった。まあ転生したのは2年ぐらい前だと思う。多分兄がそろそろ悪戯を始めるのではないかという歳になつてきた。さて、俺と一緒に転生した者がいてそいつは俺の一・・・なんだつたんだろうか？まあいといとりあえず俺は知り合いというか親？の知り合いでスタンという爺さんの書斎で同僚と一緒に魔法の勉強中だ。

「そんなに魔法の勉強は面白いかの？」

「「はい！（もちろん）」

「そうか、そうか。魔法学校に行つた方がいいんじゃないのかの？」

「英雄の息子だからって機体を押しつけるような奴らの所には行きたくない」

「私も」

「そうかー・・・

そつそつ俺と一緒に転生した奴の名前はアイル＝ヴァインベルグといつ。

こいつは俺の戦友？いや同僚で幾度となく背中を預けともに犯人を捕まえたが、俺の判断ミスでこいつを死なせたことには変わりないので本当に申し訳ないと思っている。

だが今は一緒に俺の判断でこいつを死なせるようなことはないように気を配っている。

そうそう田じろの鍛錬は重要だとかどこの偉い人は言っていた気がするので俺は毎日5km（田測というか勘で）走っている。体力をつける事が今の課題だ。

体力がなければいざという時に大事な人を守れないしな。

そういうえばスタン爺さんが変わったことを言つていた。それがかなり気になる。

「スタン爺さん」

「なんじゃ？」

「前に言つてた死ぬ気のなんたらの話してよ」

「ああ、いいぞ」

「前の死ぬ気の炎の持ち主は聰明で物事を広い視野を保ちつつ見る人物じゃつた。お主たちにもその死ぬ気の炎の系譜に紡がれている。心配するな」

「その死ぬ気の炎つていうのはどういう物なの？」

「そうじゃなー、言うなればお主たちに秘められた可能性の様なもののじや」

「ふーん。」

口クな情報を持つてないようだ。一応使ってみようとしているが一向に使える気配がない。

おや？ そろそろ日が落ちようとしてるようだし、そろそろ帰るとしよう

「スタン爺さん今日は書斎開けてくれてありがとう」

「んん？ ああ、気にすることではないぞ」

「ありがとー、じゃねー」

「ありがとうござります。」

「気をつけて帰りなさい」

ガチャ キィイイ バタン

その日の夜事件が起きた。

いつもの日課で俺とアイルは家を抜け出し森の中にある開けた場所に集合し、自分が決めたルールと日課を守りつつトレーニングをしていた。

最中村の方向が妙に明るく騒がしいことに気がついた俺は単独で森を抜け村に向かうと

そこには羊の様な角を話した黒い人のようでそうじゃないものがひしめいていた

その黒い人影は口を開けると応戦していた村人にビームを放ち、そのビームが当てられた村人はどんどん石化していった。

「あああ・・・ あああああーーーーーー！」

俺のうめき声の様な悲鳴を聞きつけたのか黒い人影はこっちに走つてきた

「マダイタノカ、サツサトシマツシテヤル！」

俺は目の前の惨状に取り込まれていたかのようにその黒い人影の瞬理解できなかつた。

そして戸惑つた末理解し俺は走り出したが所詮は幼児。

すぐに追いつかれとっさに振り向き腕を目の前でクロスさせるが所

詮幼児。思いつくり黒い人影の拳が叩きこまれる

ガツ！

その音を聞いた瞬間俺の視界は加速し
石で出来た壁を3回ほど貫きとある民家の壁にぶつかり停止した。
停止した際に強かに背中を打ちつけたため肺の息は思いつ毛り排出
され、絶息

「カハアツ！ ゲホゲホ！！」

「マダイギガアルノカ? オレノイチケギニタエルトハコソウ、ナカナカミドコロガアルナ。ミライガキタイデキルガアルジノメイダ。
サヨウナラダ」

卷之三

この状況では誰の声かは判別できないが指示通り伏せると魔法の矢が飛んできてその黒い人影を吹き飛ばした

黒い人影を吹き飛ばしたと思われる人物が俺の視界に入った。どうやらココロヴァさんだつたらしい、回復魔法使うわよとか言ってるから魔法使いだつたらしい。新事実だ

「それより、石化をレジストして解呪しないと……」

「アタシはもう間違は合わないわ。だけどそれだけの知識を持つているならアンタは大丈夫ね。その知識を使ってアンタは幸せに生きなさい。アーニャにもネギにも伝えて頂戴」

「アンタは強いね、今にも泣きそうだけど」「そろそろ見たいだから、はなれなさい。」

そう言って俺を突き飛ばすとすぐに石化が全身に回り石像と化してしまった。

俺は悲しみを咆哮で紛らわしつつ、これからのことを考えていた。
そして俺は気付かなかつた。 とある力が使えるようになつていていたこ
とを

第一話

あの後俺は「どうと腕は骨にひびの入った状態に戻された一応は「ロロロヴァ」さんの治療を受けたが魔力が足りないのか鱗の状態にしかならなかつたのが現状だ。

再び自分の状態を確かめるためまだ動かず目を瞑り瞑想のようにしていると魔力とは別の力があるのに気がついた。端的に「どうと燐ぶる炎みたいなもの」

目を開けてみると視界が妙にクリアなのに気がつく額を触るとほんのり熱い、そして炎を手に宿すイメージをするとイメージ通りに手に炎が宿り自由に使えるようになつていた。そんなことに気を取られている暇はなかつたことに気づき再び歩み出すとは言つても目指すは小高い丘だけ。

とりあえずダッシュするけど腕にダメージのかからないように走る。走つても腕にダメージ来ることつてないけどね走ること5分ほどで小高い丘に到着。死ぬ気の炎を使つたせいか気絶してしまつた。

「知らない天井だ」

テンプレの如く咳いた後、起き上がろうとするとき全身に電撃が走つたように起き上がりなかつた。

「つーーー！」

医者の話によると腕のひびは1週間もすれば元通りらしい。あと全身が筋肉痛を起こしているらしいくちらも1週間もすれば問題なく動けるらしい。訓練のおかげかもしない。

「「ンンン」 失礼するぞい。」

「どうぞ」

「メルディアナ魔法学校の校長をしてる者で、君ら兄弟の祖父に当たる」

「へえそうですか、それがどうかしましたか？」

「それがのお、君らには急速魔法学校に入学してもらひ

「そうですか、でも僕にはやることがあります。」

「それはなんじゃ？」

「教えても意味ないでしょ、僕にメリットがない。」

「そうか、それなら言わんでもよい」

「村の人はどうなりましたか？」

「村の人はまあ大丈夫じゃぞ」

「へえ」

「体に触るじや らづからわしはもう行く」とこじょうかの

これ以上言つことはないという風に病室を出て行つた

それからの1週間という物全然人も来ることはなく（看護師さんぐらいは来たけど）静かに過ごすことができた。

退院した俺は3日遅れの入学と相成つた。

とは言つても何もすることがなかつた。いやあつたけど。ほぢんどスタンさんの書斎にて読んだ物を覚えてあるから大体はわかるしついていけるわけで。練習したのは炎の使い方と影の転移の仕方と影の倉庫の練習だね。

あ、あと口調が変わっちゃつてさ。色々と混乱招いたみたい。どうだつていいけど

あとホームセンターに行つて20?のバーベキュー用の炭を買って言つたら驚かれちゃつてさ、まあわからなくもないけど。その後適当に林にもつていつて鍊成してダイヤモンドにして売却。そのころには影の倉庫もできるようになつてたしマネーを普通にしまつて売

らずに残しておいた奴もしまってある。なぜかつて言つとまあアリ
アドネーに行つたら活動資金にでもしようかと思つて残してあるだ
けなんだよ。そうそう、なんていうか俺には仕立ての才能があつた
らしく、服とか作るのがすっげーうまいまいわけ、この才能使って武装
とかできたらいいなーと思つてる。この一年なつたことひと皿えばそ
れぐらいかなまあその一年は割愛するよ

「校長ー、そろそろ春休み終わっちゃうねー。」

「そりゃ寮生活だし、後話があつたからかな。
に来ておるのだ?」

「そりゃ寮生活だし、後話があつたからかな。
話といつのを聞こうか。」

「アリアドネーに留学しに行きたいから紹介状とかその他もろもろ
ようしき、話は以上だから失礼するね。じゃあまた!」

「待て待て待てーゐ!話はわかつたがのーちょっと待つてくれんか
?」

「いやだね、僕の準備が整い次第僕は行へよ

「も、目的だけでも教えてくれんか?」

「いや、だから留学だつてーの」

「他意はないんじやな?」

「ないつぢやあないし、あるひぢやあるんじやない?」

「どつちなんじやー!」

「どつちでもないよ、一応言つておくけどふざけてないから。」

「そりゃ、明日には書き終わってるぢやるから取りにきなやー

「へーい、失礼しましたよーと

かーでマフィア(というなの便利屋)再興と仕立て屋稼業を始める
よ(予定)

第一話

翌日。

「よつすー！校長取りに來たよ」

「つむ、ちょっと待つのじや」

「あいよ」

校長は何やら引き出しから一丁拳銃と一対の手袋とビニカの制服上下とボックス七個と指輪七つと封筒2通とビニカの女子用の制服を取り出しあがつた

「何コレ？」

「渡す物じゃけどなにか？」

「なにかじやないよー何この制服！ボックスと指輪の関係性を端的に述べよー！」

「指輪とボックスはスタンにしかるべき時まで預かっておいてほしいと言わでの。制服はまあ気にすこ（バタン！）失礼するよー」
「おお、来たようじやの。それでは説明しようかの」

「まさかと思うんだけどさーアイルもつれてけどこいつのか？」

「H A H A H A そのまさかじや」

「ふつざけんなよー曲がりなりにも俺は男だぞーーしかも足手まといとはいわねえけどそこそこ危険な留学なんだぞーー」

「本人の希望じやし、まあ一人加わるつとも変わらんじやろー。
何戯てる暇があつたらせつと仕事しろよ、つたぐ。」

「これからよろしくねー、マナ」

「わかつたよ、勝手にしろよ・・・・」

それよりも良く見るとあの制服武道高の制服じやんーなんでもつと

るん？

「それより時間じゃないの？」

「え？ 本当だ！ 行くよ！」

「え？ ちょー何？」

「手だして！ ほらほら早くしろって」

「え？ え？ 何？」

「ツチ！ もう、早く手伝わせりつての！」

「うん」

すぐさま手を握ると額から炎が噴き出し、握つてない方の手から思いつきり炎を噴射し校内を駆け、玄関で靴を履き替えると同じように戸口に向かう。

「ちょっとー早すぎるよーー！」

「算より早いんだからいいでしょ？」

「そうだね・・・」

「これ以上の反論がない所を見るとあきらめたよつだ。俺の勝ちだなーー！」

ゲートポートについたが人は少ないみたいだ

知らん人と話したけど普段はもうちょっと多いよつで今は時期が時期だけに少ないらしい。

「おーいー！ ゲートポートが開くみたいだーみんな魔法陣の中に集ま

つてくれ！」

「余裕だつたね」

「そうだね」

俺たちも移動を開始して陣の端のあたりに移動する。

ほどなくして陣が光だし、目の前を覆い尽くすと目的地に到着して
いた

預けたものなんて大したものではないが一応取りに行く」と云いつ

「マナ・スプリングフィールド様ならびにアイル・ヴァインベルグ
様ですね？」

「はい」

「杖・刀剣など武器類はすべて封印箱の中になります。強力な封印
でゲートポート内では会場できませんので」「承を。」

「はいはい、杖とか持つんだつたら武器類の許可証とか必要になり
ませんか？」

「MMでは武器を携帯する場合許可証が必要になります。こちらで
発行していかれますか？」

「是非お願いしようかな」

「はい、ではこちらの書類に必要事項をお書きになつてください。
御連れの方もお書きになりますか？」

「そうしようかな」

御一行書類書き込み中

「記入漏れはあつませんね。では武器携帯許可証をお渡しします。

ハイどうぞ。」

「「ありがとうございます」「わざわざ」」

「さて、最初の目的地は新オステイアかな」

「そうだね、まずは向かうとしようよ」

「はい、再び手を出して

「またあ？」

「しようがないじゃん、俺しか使えないんだし」

「恥ずかしいんだけどなー」

「それも慣れれば問題ないってさ」

「そんなもん？」

「そんなもんそんなもん」

恒例と化しつつある会話をしつつ手を出して手を握ってくれるまで待つ
もうしようがないなーとか言いつつ手を握る辺りがちょっと可愛かつたりする
手を握ってくれたのでそろそろ向かおうと思つ

(縮地无彊・・・！)

半径2mが円形にひび割れた後円形をクモの巣のように縦筋の亀裂
が入り飛び立つ。

(距離は大体1万1000キロ・・・ 続くかわつかんねえなー)

地上から約45度の角度で縮地无彌をしたので地上に少し力が逃げてしまいあまり飛距離が伸びずに大半が死ぬ気の炎による飛行に相成ったわけである。

「ふーっ・・・ あ”ー疲れたあー」

「あんな速度で飛ばなくたつていいじゃない、もうー」

「スカつとするでしょ？」

「まあしなくもないけど」

そう言つてそっぽを向いてしまつた。どうやら機嫌を損ねたようですが「奢つてやるからなんでも食べていよいよ

「やつた――――」

「店員さん――おお、来た来た。俺はとりあえずアイスコーヒーを

頼む」

「私もアイスコーヒーとのチョコレートをお願いね」

「はい、かしこまりました」

営業用とわかつていても晴れやかな笑顔だと、いつも気分良くなるよね

こんな対応がこここの店の人気の高さのだらう。

店にはかなり人が詰まつておりここまで来ると多少暑く感じてくるほどだ

この店の繁盛の訳は多分飲食店としての質の高さと営業用とわかつていても魅力的な笑顔だらうと俺は判断した。だがしかし、賑わい過ぎて熱い・・・。そんなことをつらつらと考えていると注文の品を持ってきてくれたようだ。さつき注文を行つた店員さんが戻ってきた

「そうだ、コレチップね」

「ありがとうございます」

「そうそう、聞きたいことがあるんだけどいいかな?」

「なんなりとどうぞ」

「ボンバーレつていうマフィアについて聞きたい。」

「――そのことについてはお話しできませんね」

「そう、なら信用のおける情報屋を紹介してほしい。ああ、あとこれチップね」

「それなら3軒先の路地裏にあるタクティックスロジックと、う名前の武器屋の店主に聞くといいですね。では、」ゆづくつおへつりください

「ん~、おいしいっ!」

「それは良かった」

にしても人が多い・・・。ただけの数の人人がいると気配に氣を配る

とかできやうにないな。

だけどこの人の中でもあり得ないぐらいこちらを直視してゐる人がいる。視線ぐらい気付けないと魔法使い失格だよね（笑）でもその人の視線にヒリヒリするような感覚が含まれてゐるから多分刺客か暗殺者だと思うな。

たぶんこのカフェでボンゴレの話をしたから衛兵に聞かれたんだと思う。

対応が早いなー、これだと武器屋行くよりも宿屋に行つた方がいいかもしれない

「そろそろ勘定をして店を出よつと思つんだけビビリ思つへ。
「いいんぢやない？私も食べ終わつちやつたし
「んじや行こうか、お姉さんーここに勘定置いておくれー。
「またのおこしを心よりお待ちしております
「ああ、そうだ、ギルドつてどこにあるかわかる？
「JUJUとは逆方向に五軒行つた所だよ、この並びだから忘れないで。
「オッケー、あと宿屋は？」
「それはまた逆方向に一軒行つた所で向かい側だから覚えてねー」「ありがとう、また来るかもしれないから
「氣をつけてねー」
「はい」「はい」

俺たちはまず宿屋に向かつた。

「ハイいらつしゃい。珍しいね子供一人旅とは・・・」「ちょっと留学しに来たんですけど留学するまで期限があるので見て回るうかと思いまして」「何泊泊まるんだい？」「とりあえず一泊」「一人で使うかい？」

「とりあえず」「つべツドがあると助かります」

「わかつたよ。じゃあ150Dつかな」

「はい、これでたります?」

「ああ、足りる足りる十分だ」

「今の時間だと夕食しかとれねえけど大丈夫か?」

「大丈夫です、心配ご無用ってね」

「一階のA-204号室だ、自由に使いな

「ありがとうございます」

「あと俺のことはマスターと呼んでくれ」

「わかりました、僕のことはマナでようじくお願ひします。じゃあ

それでは。行くよ?」

「え?ああ、うん」

ほほついていけない領域を見ているかのよつぼーっとしちゃって
何をしているんだか。

「やつと休めるー」

「何もやつてないのに何を言つてるんだか・・・」

「でも緊張するんだものしうがないじやん」

「まあいいや、ちょっとギルド行つてくるから」「うむうむ」

「うんわかったよ。」

実を言つとつてきている人の始末だったりするんだけどね。

「ちよつと街を見てきます」

「氣イつけてなー」

背を向けて声の方向を向かずに片手だけで返す。

適当に歩きつつ裏路地を田指す。ここまで徹底して氣配を消して視線だけ残すのつてす"こと思つるのは俺だけか?

「ねえ、そろそろついてきてる理由聞かせてほしいんだけどなー」

俺はコレが戦闘へつながるとほんの微塵も思っていなかつた

「ねえ、そもそもついて来ている理由を聞かせてほしいんだけどなー」

なんとなくだけど盗賊みたいな人が来ることにはわかつてたからこうやつて裏路地まで来たわけだけビー・・・ハッキリ言つと面倒だよね。

振り返らずに返答を待つ、多少の緊張があるから少し長く感じじる。

「そんなの至極簡単、お前の着てる服から貴族出身だと思つたかられ」

「そんなにいい服じゃないと思つけどなー、まあいやそれで？何したいの？」

「身ぐるみ全部置いてきなそうすりや命ぐらいは勘弁してやるぜ？」

「そりや無理だよ、お兄さん。僕は一応留学しに來たからね」

「へつそりや災難だつたなー、世の中そんなに甘くねエんだよ。」

「甘くないことについては概ね同意見だね、まあ災難だつたんじやない？多分ね」

「ふつ、そうだな。野郎どもやつちまえ！」

その頭領と思しき人物からの号令で体格のいい男たちが一斉に襲いかかってきた。

5分後少年以外には立っている人影はなかつた。

血の池にたたずむ少年はどこかそこら辺に転がっている石ころ眺めるように転がっている死体を眺めていた。自分のやつたことをいまいち理解していないよう。

「かはは、傑作だぜまつたくよー似た感じと思つてよつてみれば

こんな所に来るとはなー」

「うなー、まじっすか。なんというかあれですねー、私が『はずれた』時みたいですねーそう思いません?人識さん」

「そりだなー、つづーかその現場見てねエから何ともいえねえつつの」

「誰?」

「自分から名乗るのが礼儀つていう物だと思つぜ?」

「マナ・スプリングフィールド」

「マナねえーゲームでよく聞くマナですかー?つてな嘘だよ嘘。人の名前でギャグとかいわねエから」

「名前教えてもらつてもいいですか?」

「零崎人識つていう殺人鬼だ、覚えなくていいぜ」

「同じく零崎舞織です」

軍服の様なものを着て顔面刺繡をした人が零崎人識さんで、赤い二ツト帽の女の子が零崎舞織さんらしい。

「ああ、そうだ、言い忘れてたぜ、こいつ現場つて初めてだからどういえばいいんだろうな舞織ちゃん」

「普通に言えばいいんぢやないですか?人識さん」

「じゃあ普通に行きますか」

「少年「家賊にならねえか? (なりませんか)」

「多分僕も『外れたん』だろうね」

何というか理解できた、本能つていうか勘が働きかけるのかこの人たちと俺は同じにおいがするつていうのがわかつてしまつた。だからこそ俺はこの人たちの言葉を受け取り家賊になつたんだろう。なんて言うか多少気恥かしいものがある

「そりだなー、俺たちは外れた者同士つてなわけだこれからよろしく頼むぜ」

「よろしくせんです」「

「せうだ、留学しに行くんだけつこいくへー」の「魔法世界にいるつてことは多少使えないと辛くない?」

「そんなんなくたつて生きていけるつて

「そうですよ」

「女の子とイチャイチャできるんだぜ?・自分も女の子になんなきやいけないけど」

「へー來てる限りパラダイスであるこのには変わんねーナビ、俺が女になんの?」

「そうそう、そういう魔法のかかつた飴玉があるわけでね。高かつたーマジで」

「面白そうだしこよ行つてみつかねえ、なあ舞織ちやん?・」

「確かに面白そうではありますね人識さん」

「意見はまとまりましたか?御一人さん

「先導頼むわ」

「あいよ、それよりなんて呼べばいいの?俺より年齢が明らかに高いわけだし

「呼び捨てでかまわねーよ」

「右に同じくです」

「とりあえず武器屋に言つてもいいかな?」

「構わねーぜ、こつちも武器使いつちまつて足りなくなつてたんだ

「私は関係ない事ですね

「羨ましいぜまつたく」

俺はどうやら踏み外したらしい、まあ別にどうしたことではないと思つて俺の判断はそのうち間違いだつてこと元気がつくのは大通りに戻つてからのことだった

第三話（後書き）

零崎になつてみました。

なんというか面白そ�だつたんです

俺の気まぐれだつたんです

零崎とか関わつてみたらおもしろうだと思つたんです

俺の勝手な妄想につきあつてくれる人だけでいいです

俺の妄想につきあつてくれる方は次回もよろしくお願ひします

無理に零崎にしてしまつた申し訳ない

あと戦闘描写が全然なくてごめんなさい

この二人は零崎一賊が壊滅した後1、2年ほどたつてゐると思つてください

第四話

僕ことマナスプリングフィールドと零崎二人組はタクティックスロジックつていう武器屋の前にいます。外觀がやばい。
ボロッボロなんだけどー・・・大丈夫なのこれは？魔法の矢1発で
壊れそうなぐらいもろそくな壁してると・・・
中は大丈夫だろ？と叫つ希望を持ちつつ僕ら一行は中へと入った
カラんカラん

「いらつしゃい！どんな武器を探しに来たんだい？」
「おっちゃんナイフあるか？」
「あるぜー、これは素晴らしい一品でなー」
(どうだつていいんだけどなー、結構値の張るものばかりだし・・・)
「マナー、マナーおい聞いてるか？」
「ああ、『じめん考え方してたわ。』で、何？」
「この五本買うから金よろしく」
「えーわかつたよ」

(話じやボンバーのこと聞きたければここの行けつてこの話なんだ
けど・・・。)

考え方をしながら品物を眺めていると田に入る刀が一本

「ねー、おじさんこの一本の刀欲しいんだけど
「まあ片方が売つてやつてもいいがもう一本はやめときな
「なんで？」
「この刀はな、なんでだかは知らんが触つたものを氷漬けにしちま
うんだよだからやめておけ
「試すのはいいんでしょ？なら試わせてもいいぜ」

「おこー！本当にやめ？「全然凍らないじゃないか」凍らない奴がいた……だと……！」？」

「！」の刀一本分の代金置いておくぜ」

「お、おう……」

「聞き忘れてたけど、ボンゴロとマフィアについて教えてほしい

「ん？ああ、いいわ。あのマフィアの者達は本当にいい奴らじゃつたなー、あいつらはファミリーの者であらうとなからうと田の前に危険な目にあつている者を保護しファミリーに加え守つておったんだ。世間一般ではマフィアなどと呼ばれていたがあいつらは絶対に違う。マフィアなんぞという物ではないマフィアなんぞという枠で押しどざめるには惜しい存在だ」

「ふーんありがとうおじさん」

「その程度のこと禮を言われることはない」

「あとそのマフィアの人たちに連絡がつくなら教えてほしいんだけど」

「んー？連絡か？そんなものいつでもつくれがどうしたんだ？」

「なら伝えてほしい『ボンゴロを再建する、2日後夜12時にアリアドネー魔法騎士団候補学校近くに集合されたし目印はオレンジの炎』と」

「わかつたぜ、必ず伝えといてやるよ」

「全員にですよ？お願いしますよ」

「わかつてゐるつてのー！」

その後軽く談笑し、宿屋に戻つた

金だけ渡して宿屋に零崎一人組を泊め翌口に出発する」と決め、夕食を食べ就寝

その日の夜珍しい夢を見た

「なんだこりやあ、動ける夢とかマジ珍しいな

「こんばんわ、『主人』

「はあ？ 何を言つんだこの美人は」

目の前で挨拶をしてきた青を基調とする着流しを来た美人さんが現れ、しかも御主人などと呼んでくる次第。どう見ても俺の深層心理にある欲望つて奴ですね本当にありがとうございました。
本当に美人だなー、良く見ると目とか鼻とか整つてるし纏めた髪が雰囲気にあつて引き込まれる感じなんだよ。

「私はあなたの持つ刀に宿る精霊だよ、名前はないけどね」「はー、精霊ねえまああれか俺の深層心理がこのような夢を見せるんだろうな。きっとそうに違いない」

「いやいや、私が夢の中にお邪魔したのですよ」

「うん、その精霊さんは俺に何用かな？」

「私は代々ボンゴレからボンゴレに引き継がれる刀なのです、こんな形で出会つてしましましたがあなたが本当のボンゴレのボスなのです」

「へえー引き継がれるべくして引き継がれたというわけ？」

「まあそんなとこです」

「じゃあ名前でもつけよう呼びにくいし、そうだなー吹雪とか？」

「いいですねーありがとうございます御主人！」

「じゃあ吹雪よ、これからよろしくな」

「はい御主人！ それより朝みたいですよそろそろお起きになつてください

「あいよ」

最後に振り替えると赤くなつて俯いてる吹雪の姿が視界の端にあつた。

「おはよーマナ！」

「ん？ オウ、おはようアイル」

「はいるゼーマナ」

「おじやましまーす」

「そろそろ出発する？」

「そうだな、出発しよウ」

「行こう行こう！」

「そうしましょウ」

俺たち二人組 + 零崎一人を加えた一行は階段を下り宿屋を後にし影の転移を何度も繰り返し

アリアードネー魔法騎士団候補学校に向かつた

アリアードネー魔法騎士団候補学校についてのはいいんだけど・・・

「あんたら何者よ！」

「不審者よ不審者！！」

「いや、そんなことはないんだけど」

「じゃあ何者よ！？」

「とりあえずこの手紙を総長さんに渡してほしい」

とりあえず俺とイル分の手紙を渡して身柄確保

「とりあえずわかったわ、渡してくれるわ」

「あの二人はなんなの？」

「いやーちょっと事情があつて連れてきたんだ」

「総長がお呼びだから4人ともついてきて」

(もどりてくんのはえー・・・)

「やつとですか」

というわけで総長室に到着

「扉でけえー・・・」

「ンンン

「（ 開いていますよ」

「 「 「 「 「失礼しまーす」 「 「 「

「メールディアナ学校長から連絡を受けています」

「それはありがたいです」

「とりあえず2人は受け入れますが残りの二人はー・・・

「そうっすねえーこれでどうつすつか? (コトリ)

机にダイアモンド直径20cmほどの塊を置く

「裏口ですか?」

「いいえ、僕らと同じく3年通わせていただければ結構です」

「そうですか、それならばこれでお受けしましょう」

「 「 「 「 「ありがとうーございまーす」 「 「

「 「 「 「 「失礼しましたー」 「 「 「

一応留学は成功したけど再建はどうなるのだろうか
このことだけが頭を離れず頭を悩ませていたのだった

第四話（後書き）

今回買った二本の刀について

1：研無刀

「斬る」よりも「破壊する」事を目的として硬度と重量を増加させた刀で、「切れ味」そのものは皆無である。研無刀の鞘も本体の重量に耐えるため、本体と同等の強度を持っている。（[Wikipedia](#) マンガ「斬」より転載）

2：氷刃【雪月花】

今作に出てくるこの氷刃【雪月花】はボンゴレボス候補からボスにふさわしい人物を選び出すために作られた精霊の宿る刀。刀を抜くと空気をも凍らす冷気が噴き出す魔力を流すと切れ味、強度が増す。

第五話

俺たち4人の編入から2日後の深夜零時

俺は上空約100m程度の所で炎の強さをちょっと強めにして目印になるように待機しているわけだけど、寒いね

夜だし100m程度とはいっても空は空で変わらないわけで。とりあえず氷刃【雪月花】だけは腰に差してきたけど

「くあ・・・

(やべえ、眠い)

多少眠気眼をこすりつつ騒がしくなってきた下の方を見ると人だかりができていた

一応降りて話をみると14代田ボンゴコレの時の構成員たちみたいだ

「再建するから手伝つてほしい」

「はあ（呆然）

「えーっと詳しくは俺の方からつていうか俺からしか説明できないよね、とりあえず説明していくよ」

「――おう、頼むぜ」「――

「ギルドっていう形で再建するか?」

「おいおい、何言つてんだ?俺たちはマフィアだぞ?ギルドだあ?そんなあまちやんみたいな真似してられるか」

「おいおい、口を慎んだ方がいいんじゃないか?そういう風に意見を言ってくれるのは有難いんだけど僕の主張を聞いてからにしてほしいんだけど、OK?」

「ああ、わかったよ」

「ボンゴーレの成り立ちってのは自警団だったわけ、自分たちの街を、そこの住む友達、『近所さん達を守るために発足したのが始まりだつて聞いてる。だからマフィアという形は僕の目指すボンゴーレには合つてないだから僕はギルドという形でボンゴーレを再建することに決めたんだ。」

「小僧の主張はわかつたが、どうしてもそうじゃないとダメか?」

「お金も稼げるし一石二鳥でしょ?」

「わかつたよ俺たちはお前に忠誠を誓う」

「いいやー、別に忠誠なんていらないよ。必要なのは結果さ」

とこつ軽い感じで再建をし始めたボンゴーレだがほぼ動きがない。動きがあつたとすればボンゴーレのギルドメンバーが増えある程度のこと

1年ほど割愛するよ

さて、ギルドメンバーも増え支部も増えたわけだが。魔法世界に支部を置くのも限界のようなので旧世界に進出しそうと思つ

魔法世界に置いた支部はとこつと2か所程度だが支部がまた支部を置いているためほぼネズミ算式に増えているようなものだ。旧世界とこつわけでやはりソノは関西呪術教会にお邪魔しようかと思つてこる

「ノンちわーっす」

「何の『』用でしようか?」

「関西呪術教会の長殿はいらっしゃいますか?」

「はい、いますけどどうかなさいました?」

「ちょっと支部を置かせていただきなくてお伺いしました」

「長と取りつなぐのでお待ちください」

巫女さんは小走りで社の中に戻つて行つたがなんというか巫女服つ
ていいよね

やっぱり巫女服は最高だね！…マジで

「こんなにちわ、マナ・・・くんでいいんだよね？」

「ええ、構いませんよ」

（俺の性別疑われる！？）

「今回はどうなじ用件でいらっしゃったんですか？」

「支部を置きたくてその挨拶とこちらの組織と仲良くなつておこつ

かと思いまして」

「こちらも懇意にさせていただくより努力させていただきます」

「こちら親書になります」

「どうもありがとうござります」

「ちょっと時間の都合でこれ以上は滞在するわけにいきませんので
これにて失礼します」

「今度はゆつくつと話しおしましょ！」

「ええ、それでは失礼します」

（ふー・・・久しぶりに日本に来たんだから足を延ばすのもいいか
（な）

足を延ばしてとりあえずぶらつと2、3県またいで麻帆良まで来た
はいいけどどうして毎回毎回困れたり、声掛けられたりするの？
俺は怪しい人物ですか？俺はそういう運命の元生まれましたかつて
言いたいわ

「君は何ものだい？ 麻帆良に何の用だ？」

「ただの観光ですが？」

あのガングロ先生見たことあるような気がするけど思不出せねーな

「そんなわけあるか！悪の魔法使いだろー！」

「頭ごなしにそんなこと言われても困る・・・」

「黒スーツに赤いローブなんて怪しそうじゃないか！？」

「俺のスタイルにケチ付けられても困る・・・」

「そしてその顔！その糸目とにへらつとした顔が何を考えているか怪しいじゃないか！？」

「俺の顔にケチをつけるなら生んだ親に言つてください・・・」

（あれ？拷問？言葉責め？あるえー？）

「とりあえず覚悟ー！ー！」

「それはなしだろ・・・」

牽制で銃での射撃からのひびきで手を取りひつとするが逆に組み伏せる

「あれえー？正義の魔法使い殿が悪の魔法使い（嘘）に組み伏せられていいんですかー？」

「つるさいーはな」「そこまでだよマナくん」「高畑先生！」

「ええつとどちちらさんかな？」

「知らないのも当然か・・・僕の名前は高畑・ト・タカヒチ君のお父さんの仲間だったんだ」

「ああ、はあ、で？」

「え？」

「それがどうかしたんですか？と言いたいんですけど」

「いや、お父さんには憧れてはいないのかい？」

「はあ？育児放棄した親にどう憧れるというのですか？頭おかしくないですか？大丈夫ですか？もつ話すことはありませんねでは失礼（まったく気分が悪い・・・）

後ろでがやがや言っているようだが完全無視し一旦京都に戻り建物を買収し、内装の改装を頼み一時に個人用転移ポートを設置させ

てもらい魔法世界とつなげそのポートから戻り留学お終わらせにかかるうと意気込む15代目の姿があつたという

第五話（後書き）

ギルドについてはファンタジーとか一次創作物に出てくるギルドシステムと大差ありません。

変わっている所は

準ギルドメンバーとギルドメンバーの違いだけです

説明すると

準ギルド（「よはボンゴレファミリー」に守られる者・匿われている者ギルド）とはボンゴレファミリーを守る者程度です。

あと次か次の次ぐらいで原作を開始します。

第六話（前書き）

留学から一年後といつも卒業の所から始まります

第六話

side マナ

卒業式が肅々と進められている
だがそんなのは関係ないよう天井を眺めている少年がいる
その顔は何かを考えているよつとも見える

(石でできてるとは思えないなー···)

(ここ)の建築様式はー···)

(次の新作はどんな服にしようかな)

無駄なことを考えていた

「 ···ス···フイ···ド···マ···プリング···ル
ド···マナ··スプリングフィールド···」

「あー、ああ、はいはい」

「(しつかりせんか···)」

「(ああ、ごめんね。考え方してた)」

卒業証書の内容を述べつつ小声で会話をする校長はとさでもないこ
とをやつてると思ひ。

「 以上、7名の卒業式を終了する

(かつたつくるし)にも程がある

「ねえねえ、マナ卒業証書の修行地どこだか浮かび上がった?」

「ああ、まだだけど?」

「楽そうだといいね」

「それの方がいいかな、ほほ修行とかいろいろいんだだけね
「そりゃダイオラマ魔法球に50日（五年）もこもってたら修行とかいらないでしょ」

「そうだね、お？浮かび上がってきたよ

「何々？日本で学生をすること？」

「また学生？勘弁してほしいよね

「なんだー、私と同じじゃない」

「つくづく僕と縁があるね・・・。

「ふふふ・・・そうだね」

「ふふふ・・・そうだね」

（本当にコイツとは縁があるなー・・・。そういえばあの子にも連絡しておかないとなー、あの子『私に仕事などで会うことがあれば事前に連絡してね』とか言つてたし）

鬱だ・・・などと考えながら自分の部屋に戻り携帯を開きある人物の番号をプッシュする

2ホールで出てくれた、案外早いお出ましのようすで

「ああ、迷^{ハナシ}?仕事以外でそっちに行へことになつてさ、その時は案内とかその他もうもう頼めないかな?」

「

「マジでか?あのいつもお前と一緒に並んで帰つてゐるあの子が?魔法抵抗力が素で強いのマジでかー普通強くないだろ?嘘じやないの

?

「!」

「そんな怒るなよー

「?

「ああ、明日こひそひ行けるからその時は頼むよ

「。

「んじやあな。

「

side out

side 罪口迷

「」

「珍しく、鼻歌なんか歌つてどうした?」

「嬉しいことがあったから鼻歌歌てるんだよ」

「いつもはそんなことねーからなー、変わったことでもあんのか?」

「ん? 転校生が二人来るらしいよー」

「この時期にか? あり得ねえだろ」

「さあどうなんだろうねー」

「毎回毎回あれは勘弁してほしいもんだな」

罪口迷は麻帆良女子中学校に通う中学二年生だ

罪口出身で武器職人。マナとはビジネスライクな関係で投げる事が趣味なため対価はマナの体に武器を投げつけぶつ刺すことと多少の金品だが、毎回大量発注するためマナの体は毎回ぼろぼろなのだ
あれとはぶつ刺す光景を毎回見せられているため長谷川千雨の精神^{ライ}力はもう〇なのだ

「趣味だもんしちゃがないじゃない」

「あれを趣味と言うとはいさか趣味を持つ者に対し失礼だろ」

「しようがないじゃない、本当だもん!」

「みつおみたく言つてんじゃねえよ」

「ごめんごめん、ボケすぎた」

「ボケすぎたと思うならなんか奢れ

「ショーガないなー」

などと談笑しつつカフュへと入つて行った

side out

side マナ

「やつと着いたぜ日本！！」（2年前のことなど忘れていています）

「ついたね！！」

「さて転校先の学園長とか言つ人に挨拶しに行こう」

「そうね！」

迷いつつ学園長室にたどり着いた一人

「失礼します」

「開いてあるぞ」

「どうも、修業先として受け入れていただきありがとうございます」「いやいや、なんのなんの。気にすることはない」

「修行のために日本に来たんじゃな？さほど大変でもなかろうが頑張りなさい」

「はい、よろしくお願ひします」

「つむ、あと警備などの仕事もあるんじゃが手伝つてもらつてもいいかの？」

「それは僕が請負人としての『依頼』ですか？組織にくみするものとしての『命令』ですか？それとも僕がマフィア（便利屋）だと知つての『依頼』ですか？」

「あえて言つなら一番目の『依頼』かのお

「では条件があります」

「受け入れられる範囲でならよいぞ」

「では1つ僕に関する友人・知人・親戚や仕事仲間に手を出したら遠慮なく反撃を黙認すること、2つ僕が使用する魔法・武器・拳法・武術などの情報の開示を求めないこと、3つこちらの要求した条件に違反した場合違約金又はその場での反撃を認める事4つ体的には

もう成人だからたばこを吸う」とを許可することだけですかねーアイルなんかある?」

「わたしはなにもないよー」

「まあそれくらいなら良いじゃろ」

「ありがとうございます」

「制服はどうするかの?」

「ああ、それは女子用だけ用意してください。ちなみに僕の分はないので」

「そうじゃなー、住居は「ああそれなら場所を用意していただければ作ります」そうかー離れた所にある森に一軒ログハウスがあるので、そこ隣にでも作るといいじゃろ?」

「ありがとうございますー」

「うむ、では高畠君後は頼む」

「はい、一人ともついてきて」

「失礼しました」

その後教室に行くことになり多少の説明を受け高畠先生が先に入り悪戯という洗礼を見事にかわし、俺たちのことを紹介する

「今日2人転校生がきます」

「どんな子?」「どんな感じなんだろー」以下etc

「はい、静かに」

騒がしくなり始めていた教室はこの一言で鎮まる

(一言で沈めるとかすごいね・・・)

「じゃあ一人とも入つてきて」

「ちょりーっす」

「失礼します」

上から俺・アイルだ

「…………か…………」「…………」

「…………か?」「…………」

「…………かつこいい&かわいい…………」「…………」

「質問は朝倉君の方からしてね」「…………」

「はいはい! 麻帆良のパパラッチこと朝倉和美から質問させてもらうね! 名前・年齢・出身地・特技・趣味を教えてください。あとなんで男の子なのにいるの?」

「ええーっと、僕の名前はマナ・スプリングフィールドで歳は数えで9歳。イギリスのウェールズという山奥出身。特技はダーツとか投擲系のスクアマックスを出せる事趣味は読書(魔法書)で僕がいる理由については共学化のテストケースとして入学を許可されたんだ」

「じゃあ次は私だね、私の名前はアイル・ヴァインベルグ。マナと同じ所出身で特技は特になし趣味は料理かな」

「ええ! その外見で一人とも9歳とは……。個別で質問していくね! マナ君は彼女いますか? あと好みのタイプを2-Aの中で選んでみてほしい。あとなんで大人っぽいの?」

「彼女はいないし、外見で選ぶのはどうかと思うのでちょっとそこについては保留で。まあ成長期が早かつたんだよ」

「じゃあ、アイルさんは気になる人または付き合つてる人いる? あとマナ君との関係を詳しく!」

「付き合つてる人なんていないよー、マナとの関係かー一言でいえば幼馴染かな」

「質問に答えてくれてありがとう! ちなみに私は彼氏いないよー!」

(俺にアピールつか! !)

「じゃあアイルさんとマナくんは一番後ろの席だから

そう聞いた後俺の方が先に動いたので必然的にエヴァンジエリンとは隣の席になってしまった。

「ええーっと僕はマナスプリングフィールド。君は？」

「エヴァンジエリン・A・K・マクダウェルだ。よろしくしなくていい」

「いやいや、隣だから何かと世話になるかもしないじゃない」

「私はお前の世話をすることなどないから心配するな」

「ああ、そう?じゃあ世話掛けるかもしれないからそれだけは勘弁しておいて」

「そうか、それぐらいならいいだろ?」

「ありがとね、それじゃあよろしく」

俺は波乱に満ちた転校日になるとは思ってなかつた。

第七話

転校初日から時限目が終わらうとしている所だが女子校唯一の男子学生は一行として起きようとしなかった。名指しされ注意されようが寝ぼけ眼で黒板に近寄り正しい答えを書いては机に戻り顔を伏せ眠るなど修行のために学生をやらせていると言つてもながりなりにも学生である。

そして今は起きているその原因は先ほどの念話にある。

念話の内容はこうだ

「（・・・ナ君、マナ君！起きておるかね？」
「ん？ああ、ええまあ起きてますよ」
「（そうか、ではちょっとしたお知らせがあるんじやが聞いてくれるかの？」
「（あ、はい。」
「（今夜の〇時に君を紹介するので。その時間になつたら世界鏡の広場に集まつてもらえんかの？」
「（少し遅れるかもしだせませんけどいいですかね？」
「（少し（・・）じやぞ？」
「（少し（・・）ですね。わかりました、アイルにも伝えておきますか？」
「（いいや、もう伝えてあるから大丈夫じゃ。どこの誰かと違つて真面目に授業を受けてるみたいじゃしのお」
「（あはは、そうですかじやあ失礼します」
「（そうじやな、それでは今夜〇時に」
「（はい）」

で現在に戻る。

困つてこる。なぜかとこうと依頼（こう）お願い（ねが）を果たすた

めに一日田を消費しようかと思つていたのに、そこに警備の紹介と
いう突発的イベントが組み込まれ、予定表^{タイムスケジュール}が狂つてしまつたからに他
ならない。要するにじじいが悪いということになる
まあそんなことはどうだつていいが。

罪口迷との付き合いで長谷川千雨と知り合つたわけなんだが、多少行動調査をしてみると丁度深夜1~1時から1~2時の間にコンビニに買い物へ行つたり散歩してみたりなどなど深夜に行動することが多いことが実地調査による結果として判明している。

え？ 犯罪行為だあ？」まけこたあいいんだよ

ああ、もづどうすればいい？ まあ呼び出すのが一番なんだがそれだと結構人がついてくるかもしれないだから深夜に会うのが一番なんだが・・・。

などとこのような事が無限ループし始めた時不意にある場所から声が聞こえてきたというか田の前から声がする

「あのー、初めまして。相坂さよといいますこれから短い間？ ですけどよろしくお願ひしますつて言つてもきこえてませんよね？」
「・・・」

（ああー・・・なんか気が散ると思つたらこの子のおかげだったのか）

そう田の前にいるこの少女。

髪は長く腰までのストレートでこの麻帆良が制服を一新する前の旧麻帆良女子中学制服を着用している。そして最大の特徴。足がなく幽靈であること

そう、この人こそが出席番号1番相坂さよである

俺の目算が正しければこの制服は約60年前の標準的セーラー服の

はずだ。みた目から見た年齢は14～15歳程度とみて、そして死後60年プラスすると75～80歳か・・・。ざっと見てそんなものだろう。

「ああ、『めん聞こえてるよ』

「ええ！？聞こえてるんですか、見えてるんですか、話ができるん

〔四〕

「ああ、ああー！ひつぐ、ひつぐ

「え！ええ！ちょいきなり泣かないでくださいよ！ちよつと…！」

卷之三

!

そして彼女が泣きやんだのは数分後のことだった。

「二三事」

「誰」が「死んでしまったのか」との寂

「まあわかりますよ、それは」

あの言いはぐいことなんですか」といふのが

「あ、あの!! 友達になつてくださいーーー

「なんだー、そんなことか。てっきり

「……」とか刪っていいかと思つたがんばりと

「やんな」となんの声かわからぬへつてゆーが、やつだなーひめ

「おれん足りないからちよつとうち来てよ」

卷之三

「あらがと、アゼーます！」

卷之三

必死になつて頭下げる図がシユールすぎる。そして嬉しすぎてポルターガイスト起きてる。

必死になつて頭下げている幽霊の背後で椅子や机が踊りまわる絵つてシユールすぎるとは思わないか？俺はシユールだと思つ

「ああ、そうだ。ちょっと作りに行こう」

「何をですか？」

「家」

「はあ？」

第七話（後書き）

更新大幅に遅れて申し訳ない。

友達に誘われオンラインゲームやつてたら1週間たつてました。申し訳ない

今どういう展開か迷っています

というわけでここでアンケ取ります

- 1：書き手のお気に入りを仲間にし徹底的な原作ブレイク
- 2：第一主人公の登場による多少の原作ブレイク
- 3：もう徹底的に原作に沿つて動くが、多少のイベントをプラスし動かしていく

コメントが来るまでこの小説を更新するつもりはございません。

あとこんな駄目小説家の作品に今回もお付き合いいただきありがとうございますそれではまた次回

第八話（前書き）

「メントーつなかつたのでそろそろ再開しようかと思ひます

第八話

「 」

ノリ良く鼻歌を歌つてらつしやる横の相坂さん。

とりあえず下校中だ、家作りに行かないと。

多少遠いなー、スケボーでも持つてくれればよかつた

「ああーーー！マナ君探したでえーー！」

振り返ると、近衛さんが走つてこっちによつて來た。トテトテと走る姿がとても愛らしい。

「ええーーー！確か近衛さんでしたよね？」

「覚えててくれたんやー、嬉しいえ」

「で、僕を探してたつて言つてましたけど何か？」

「マナ君の歓迎会やるんよー、いざやるとなつたらマナ君おらへんから探してんよ」

「ああ、そういうことですか。なら行きますよ」

その後近衛さんと他愛もない話をしつつ、教室に向かつた歓迎会の内容を大雑把に説明すると教室に行つて飲んで騒いでー、2時間ほど騒いで怒られて解散これが俺の歓迎会の流れらしい、といふかほほ飲んでただけだしな。

「やつと帰れる・・・」「

「いいですね、ああいうの」

「大丈夫さ、多分味わえるよ」

「本ですかー？期待せずに待つてます

「やつらのところだ」

やつらまだ一ヤーヤしてこる。よほど自分の存在を認識できる人物が嬉しいのだろうか？やつぱり生きてる人間としては幽霊の気持ちは理解できるわけがないのでよくわからないが最終的な帰結なのだから。

そういうと教えているとHガガ家の前に到着し、とつあえず挨拶は重要だつと判断し、あこせつじに行くことに急遽決定し。インターホンを押した

ピーンポーン

扉越しに誰かが近づいてくる足音がある

歩いてくる人物は扉を開けずにこう訪ねてきた

「どうひれまでしようか？」

「隣に越してくる予定の者なんですが、『挨拶に参りました』

「今開けます マナ様でしたか、隣に越してくるとはどうこういとでしようか？」

「ああ、言葉が悪かつたですね。今から作って越していくって意味です。後これは粗品ですけど、どうぞ」

とこう言葉と共に、20年物のヴィンテージワインを手渡す。

「ありがとうございます。今後ともどうぞ」

「ええ、どうぞ」

ここでは話は終了し、家建築の作業に移るために背を向け移動を始める

キイイイイ、バタン

背後で扉が閉まったのを確認し、着ている赤のロープの内側に手を伸ばしつつ無詠唱の戦いの歌を発動し全体的な筋力強化後に鉄筋と雪月花を取り出して、鉄筋をそこら辺においておく。

「吹雪ー、どれくらいの魔力込めれば木切れるの？」

「適当でいいと思いますよ」

「本当に適当だな」

「ハハハハハ」

「はあー・・・。」

横に一閃、二閃、三閃と次々に薙ぎ払っていくたびに木が次々と切れ倒れていく。

約一五本ほど斬った所で切るのをやめ、残った切株を引き抜くとそこに座り込む

座り込んだかと思えば、ロープの内側に手を突っ込み木材を適当に次々とロープの内側から取り出し、木材の山が2mを超えた所で取り出すのをやめた。

「こんなところかな。」

「わあー、魔法使いみたいですね。突然刀だして木を切っていたと思えば切株を引っこ抜いて、その次には木材出すなんて忙しい人ですね。」

「まあ魔法使いだしねえ・・・。」

「え！？魔法使いだつたんですか？」

「驚く所じやないよ、もつと驚くことがあるだらうし」

相坂が次の言葉を発する前に手を合わせ、地面につけ鍊成する。

なんどびっくり、ログハウスの完成です。

「（睡然）」

「ああ、ゆづくつしようぜ。体作んなきやいけねえし。」

「あ、ああ、ああありえない！！」

「よくないねえ、目の前の非現実を受け入れがたいからって拒否するのほんくない。何事も受け入れていかないとこれからのは現実は現実となり、非田常は田常になるのさ」

なんて嘘みたいなことが口から出でてくる事自体に驚きつつ、それを隠しながらロープからものを取り出し梱包された自分の衣類や魔法具などをリビングに置き、自分の脳内にある設計図通りに作れているか確認しに全部の部屋をとりあえず回つてみる事にした。

「案外、鍊成つて簡単なんだな・・・。」

独り言を口にしつつ自分が作った家の完成度に驚いていた。
この家の構造はと言えば地下一階に七部屋、一階に三部屋、二階に二部屋という構造だ。

俺は階段を下り左に曲がると左右には二部屋ずつ客人用を作った部屋があり廊下の突き当たりに隠し扉を作りその奥に魔法球を置く予定なので、置きに行きの時近くになってきたので相坂をこの家に残らせ警備担当員たちに挨拶しに行くことにした。

第八話（後書き）

久しぶりだったので長文を避けました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6661p/>

ネギま！ 武偵が転生した？

2011年7月10日02時40分発行